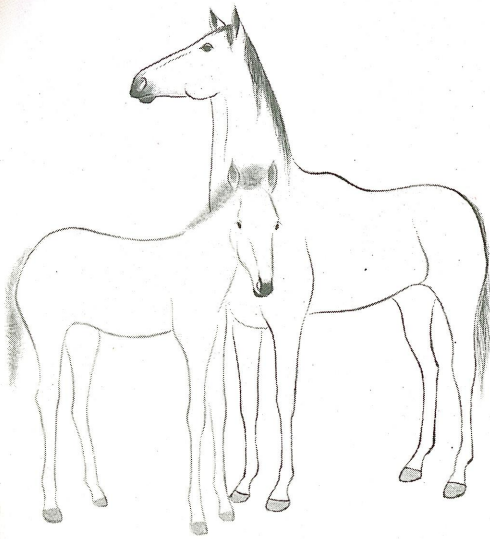
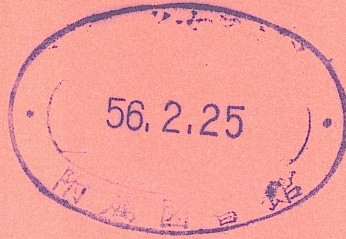


# 幼児の教育

第八十卷第四号

日本幼稚園協会

家庭・保育所・幼稚園

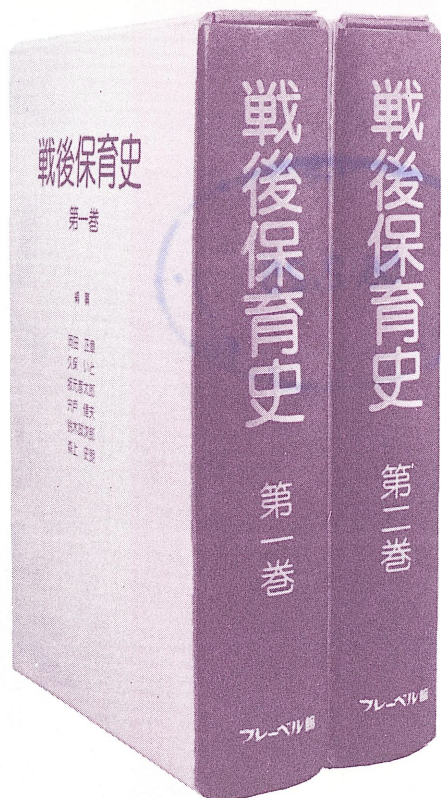


4

# 戦後保育史〈全2巻〉

A5判・上製本・セット定価・9,800円

編纂 岡田正章・久保いと・坂元彦太郎・宍戸健夫・鈴木政次郎・森上史朗



好評発売中!!

- ★日本で初めての“戦後保育史”です。  
幼稚園・保育所・幼児文化の三面から展開されている戦後保育史は、日本で本書が初めてです。
- ★行政も現場の動きもよくわかる戦後保育史です。  
法令や制度の背景、現場の受けとめ方などが浮き彫りにされていて、保育の歴史を総合的に理解することができます。
- ★豊富な証言による生きた戦後保育史です。  
歴史の第一線で活躍された方々の証言により、当時の状況が手に取るようにわかります。
- ★貴重な資料がいっぱいです。  
貴重な資料により戦後保育界の真実を伝える保育史です。全国各地の地方史も含まれています。



第八十卷 第四号

# 幼児の教育 目次

——第八十卷 四月号——

© 1981  
日本幼稚園協会

幼稚園の学級定員再論……………山下俊郎…(4)

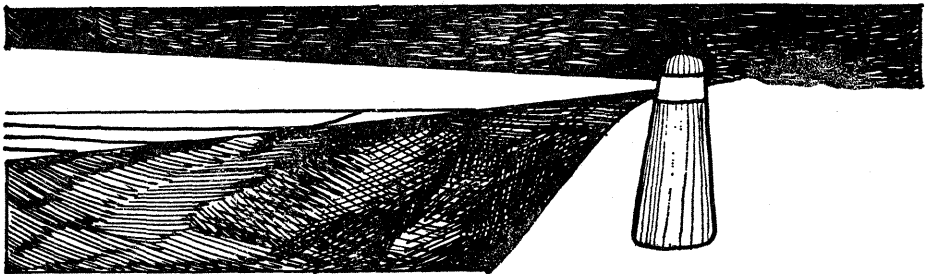
一枚の写真……………  
——メタ・テキストとしての——……………本田和子…(8)

遊びの意味……………  
——臨床教育学における遊びの役割——……………E・フェルメール…(14)

## ◆幼児減少の時代を迎えて◆

一九八一年幼稚園展望……………福田真理子…(23)

幼児が開いた“座談会”……………赤羽美代子…(30)



きびしい冬を迎えた私立幼稚園教育……………高橋系吾(34)

歴史人口学からみた生と死 四……………鬼頭 宏(38)

懸賞論文募集のお知らせ……………(47)

続・保育の中の小さなこと大切なこと ⑥……………守永英子(48)

研究会に出席して……………村石京子(50)

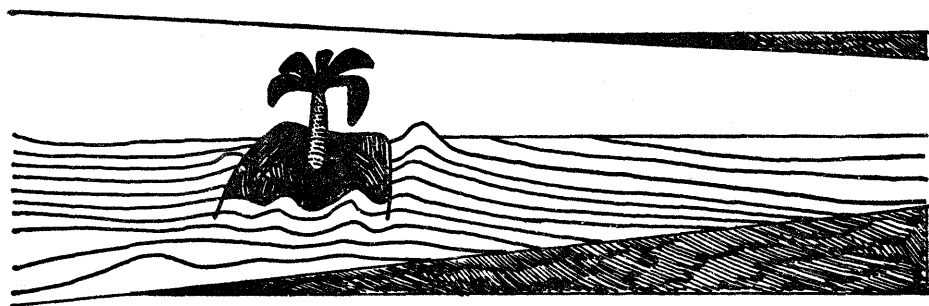
クダケスタン・ジャポニ ③……………進藤君枝(52)

わたくしのシルクロード ⑪(最終回)……………横張和子(56)

表紙・中村 宗弘

表紙題字・比田井和子

カット・福田 理恵



# 幼稚園の学級定員再論

山下俊郎

昨年の本誌三月号(第七九卷第三号)にわたしが幼稚園の学級定員について書いたが、それは一昨年(の)日本保育学会の会報にわたしの書いた学級定員についての小論が、編集者の目にとまり、本誌上でいろいろの方々に書いて頂いて定員問題を読者の認識に訴え、この問題の展開を計りたいという意図で始められた企画であった。そしてわたくしの小論に続いていろいろの方々に論じて頂く、その為の火つけ役がわたくしというのが編集部のねらいであったが、続いて四月号に守屋光雄さん、五月号は佐藤文子さん、六月号に立川多恵子さん、七月号に藤田復生さん、そして九月号に海卓子さんと五人のベテランの方々の意見が述べられた。わたくしとしては、もっと沢山の方々に毎月書いて頂いたらという期待を持っていたのであるが、八月号には誰方も書かれず、また十月

号以後には書いた方がなかった。編集部で、昨年書かれた五人の方の論文について、全体のしめくりを書いてほしいという注文があったので、最初に書いた責任上五人の方の論文の読後感をまとめて、わたくしの考えを述べて見たい。

まず、守屋さんの論では、ソ連とスウェーデンの現状を示され、それとの対照において、わが国の定員が、明治以来まったく同じ状態にあり、保育所をも含め、幼児の立場から考えないで、安上り政策、管理優先に支えられた画一、一斉教育という保育者の立場からのみ考えるから、そこにマスプロ保育が行なわれ、保育者養成の問題もからんで、人間性を無視した保育に陥るのだということで、明治以来の一学級四〇人という文明国として恥かしい状況が続いていることを指摘されている。そして、そのあとに、守屋さんがよろしいとされ

る定員数を具体的に示されている。すなわち、一歳児二人、二歳児三人、三歳児一五人、四、五歳児二五人に一人の学習者と一名ずつの助手が妥当であるとされている。わたくし自身もいつも感じているのであるが、守屋さんの言われるように為政者の幼児保育軽視という悲しむべき思想がこの問題の深い底辺に横たわっている一所に、これらの問題の根源があることに憤りと悲しみを感じるのである。

次の佐藤さんの論文では、まず冒頭に、現在の学級定員は多すぎるとはよく聞くことだけれども、その理論的根拠、実証的研究の裏づけを示したものが殆んどないことを指摘されている。佐藤さんの言われる通りであって、それだからこわたくしはそのような実証的研究が進められるべきであることをわたくし自身の提言の中で述べているのである。佐藤さんはそのような研究がまだないという現状に即して、「学級」というものが幼児に対して持っている発達の意義を考察することに、全文の中心を置いておられるが、このような総論的概論的考察はそれとしての意義はあるが、実証的研究によって問題の答を産み出すことがより大切である。前むきに研究して行きたいと述べて居られる彼女の言葉に大きな期待をかけたと思う。

続く立川さんの論文では、彼女の郷土の幼稚園の誕生、十二名の園児から始まったこの園の発展の経過の中に、おのずから学級が出来、それが年齢別になったという所には興味深く読ませるものがある。次に、他の幼稚園で学級制で出発したものが、これを解消したらやはり問題が発生して、もう一度学級、担任制度にもどった歴史の叙述も面白い。園児にとっては「ホームベース」としての学級が必要なのだという結論的解釈はこれもおのずからなる成り行きだと思われる。そこで学級定員を保育者側からと子ども側からも考える、保育者側からの発言では具体的数が挙げられているが、三五人、三三人、二七人と言った数字が出ている、学校教育法施行規則にある四〇人よりもみんな少ない所に注目したい。子ども側からは具体的人数は挙げられていないが、条件だけは考えられている。しかし、まとめとして保育者と幼児との一対一の接触が決定的要因となつて学級の人数が定められるべきであるとし、さらに園全体の規模についても考えられるべきだとする提言は正しい。わたくしは三〇〇人だの五〇〇人、甚だしきは七〇〇人定員という幼稚園はあるべき姿ではないと思う。幼稚園令時代には一園の人数の制限が規定されていたが、当然限定されるべきだとわたくしも考える。

次は独自の保育を自分の園で実践されている藤田さんの論文では、まず共鳴し、打たれるのは、一人々々の幼児を大切に考えるというヒューマニズムの欠除の上に保育という営みが行なわれていることに対する憤りをこめた指摘である。そして、藤田さんは施行規則、教育要領、設置規程などで、「原則とする」とか「標準」とするという様な表現で逃げを打っていることを、実際の条文を挙げて追求されている。また園全体の規模についてマンモス化した幼稚園の現実が、恐るべき保育をしていることを指摘して居られるし、前の立川さんの所でわたくしがふれた園の規模の問題にも論述のペンをのばして居られる。そしてそのあとに、御自身が園長として保育実践をされているゆかり文化幼稚園の実際の姿を紹介されている。藤田さんの園では学級担任制でなくて複数担任制をとって居られるが、その実際には見るべきものがある。ただ、そのまま他の幼稚園で藤田さんの園の様な保育をすることは現状では無理であるかも知れない。論文の終りの所では、一教諭の受持つ幼児数を三歳児一〇名、四歳児二〇名、五歳児二五名を標準として保育を実践して来たと具体的数字を挙げて居られることには、わたくし達すべてが目すべきであると思う。そして最後に、規準が示されるとすれば、実証的研

究の成果によってそれが裏づけられるべきであるという意味のことを述べて居られることにわたくしは賛成する。

最後の論者になられた海さんの論文にも教えられる所が多い。一人の保育者の保育する学級定員三〇人という事にカナダからの参観客が驚いたという叙述は、わたくしも全国からの訪問者に接してしばしば経験することである。海さんは長年にわたって保育を続けて来られたベテランであるだけに、その提言には教えられる所が多い。とくに学級定員について具体的数字を挙げて居られる所を見ると、三歳児十数名に二人の保育者、四歳児二五名、五歳児三〇名を望ましい形として居られるのは、わたくしにとっては納得のゆく数字で、園全体の規模についても各年齢児二組ずつで百二十名という数字を挙げて居られる。保育者の一人一人が全園児の名前を知っているということが、大切な条件だという前提から右の数字が出て来ていることもまたうなずける所である。

海さんは定数を左右する条件として今の定員問題に第一に触れたのち、現代のやる気のない子どもに接する為に、保育者の指導力と定数との関係が考えられなければならない。そして、スピード化、能率化、機械化された生活の中で、大人の生活の忙しさ、子どもの塾通いに象徴される歪められたそ



の生活の忙しさの中で、年々人間関係がうすれていく現実に対して、どうしたらいいかの提言がなされている。そして、人間らしい子どもと大人のつき合いの中で定数を考えようという最後の提言が生まれている。そこでは、人のいつていること、していることを見たり、きいたりする態度を育てよう、人と人との信頼感をとりもどそう、子どもの実態をよく掴もうという三つの角度から、望ましい保育のできるような定数を考えるべきだと結んで居られる。海さんの論旨は、具体的、実的な保育にかかわりのあるいろいろの姿から定数が論じられている所に、大きな意味があると言えよう。

\* \* \* \* \*

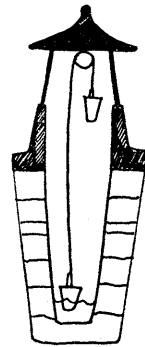
わたくしが火をつけた問題について、五人の方が、それぞれの立場から、立派な提言をして頂いたことに、わたくしはまず感謝しなければならぬ。とにかく問題は重要であり、深刻である。藤田さんは、きわめて形式的に、小学校が四〇人定員になれば、おのずから下の幼稚園は三〇人になるだろうと官僚の形式主義を非難する意味で言っているが、これすらもそう簡単にはいかないとわたくしは思う。守屋さんが指摘して居られるように幼児保育軽視の風潮が底に強く流

れている現代では中々難しいのである。この点では、教育者の集団である日教組がすでに同じようなことを露呈している。わたくしは最初の提言のとき、日教組が幼稚園の定数問題に無関心であるという非難をしたけれども、五四年度から内部では検討して五五年には決定されることになっているとのニュースがあるのを知らないで非難したことを弁解したが、その後一向にマスコミ線上に現われて来ない事自体が幼児保育軽視につながっているのではないかと、改めてここに文句を言いたい。

文教、福祉軽視という姿勢は、いくら大蔵大臣が合理化した弁解をしようとも否定できない鈴木内閣の逆行的事実である。小学校の四〇人定員の実施がなし崩しに引き延ばされている事実が何よりもよくこのことを示している。この際幼稚園の定数問題を出して論じて、保育軽視という社会的姿勢が改められなければならない、問題の前進は難しいであろう。しかし、わたくし達は、ここで地道に幼稚園の定数、そして出来得べくんば保育所の定数についても、科学的研究を遂行し、その実証的資料を以て訴える方向への努力を重ねて行くべきであると信ずるものである。

## 一枚の写真

——メタ・テキストとしての——



本田 和子

満開の桜の下に、子どもたちが並ぶ。入園の日の緊張が、彼らの表情から笑いを奪い、その幼い肢体を、硬くこわばらせる。なかには、唇をへの字に結んで泣き出す寸前の顔もまじる。

シャッターが切られた。その瞬間、待っていたように、まばたきする子どもの顔、顔。それによく見ると、中央の園長先生まで、お目を半分、閉じかけていらしたりする。

こんな一枚の写真が、子どもたちのアルバムに貼られ、幼稚園生活のはじまりの日を刻印して、その出発を記念する。彼らは、成長の折ふしに、その古ぼけた写真を手に取り、小さな二次元空間から立ち昇ってくる、「ほんのりした幼い日」の感触に浸るだ

ろう。そして、何がなし、優しく、満ち足りた思いで、アルバムを閉じるに相違ない。

私どもにとって、入園式や卒園式の写真は、一般には、幼い日をよみがえらせる手がかりとして、慎重しく、片隅に位置を占めているのだ。

◆ ◆ ◆  
ところで、私は、いま、これらの写真に、個人的懐旧の資料以上の意味を、になわせようとしている。何故なら、こうした記念碑的な写真は、個人の生育史の一駒を物語るだけでなく、それ以

上に、様々なメッセージを内蔵していると思うからだ。とりわけ、写真が未だ日常的に普及せず、「ハレの日」のものとして位置づいた古い時代のそれらの中には、子どもらの生の様態と、時代の横顔が、ぎっしりと詰め込まれていて、尽きぬ興味をそよられる。

例えば、子どもたちは、どんな装いで、どんな配列で、どこに並んでいるのだろうか。羽織・袴で？ 丸坊主で？ 立って？ 座って？ 背景は、玄関か、それとも、園庭の桜の木か？

それら映像の背後からは、子どもらの想いと、時代の想いが、透けて見えてこないだろうか。このとき、一枚の写真は、彼らについて考えるメタフォリカルなテキストとして、私どもに、「読み解き」を要求し始めるのである。

「写真を読む」という言い方は、或いは、奇異に聞こえるかも知れない。然し、私どもは、映像を、単に網膜に与えられた像として感受しているのではなく、私どもなりの意味において、解釈しつゝ把握している。私どもが周囲の世界を見て、それについて知るといふことは、それをテキスト化し、不断の読み解きにおいて、それらと出会っていると言ふことなのだ。

このような視座から、いまや、あらゆるものが、テキストとして把握され、解読の対象とされ始めた。服飾が読まれ、建築が読

まれ、都市が読まれる。写真や絵画が、「読み解きの対象」とされることなど、当り前とすら言えるかも知れない。



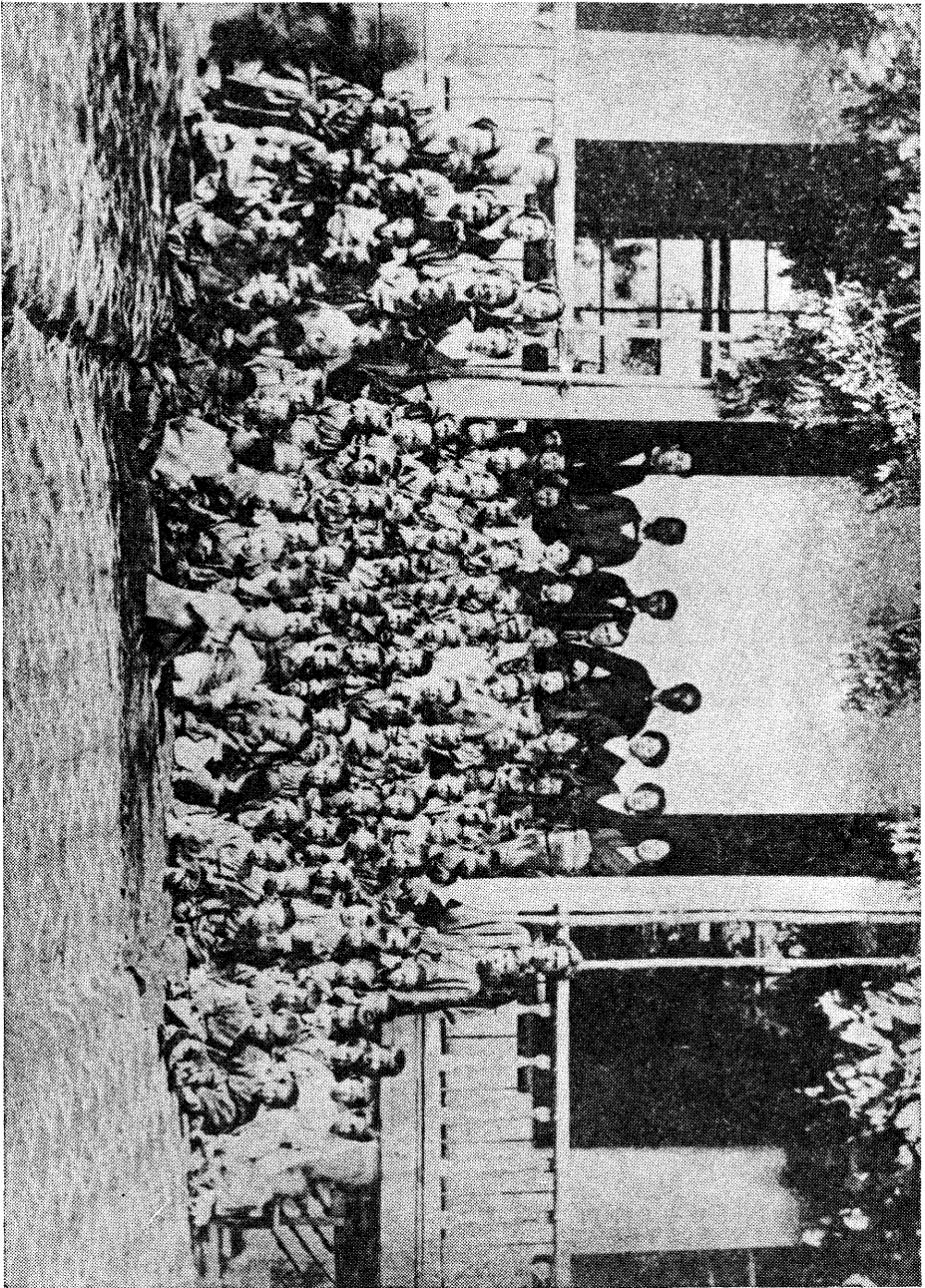
こゝに、一枚の写真がある。「東京女子師範学校附属幼稚園職員及園児」と記入され、明治十五年の日付けが入っている。(写真<sup>1)</sup>)

全園児が一場に会したことは、何らかの意味で公式の機会なのであろうが、確かめるすべはない。手すりに匍匐させた藤の枝に、花房は見えず、葉だけ見事に繁っている。恐らく、卒業式の季節ではなく、入園式か、或いは、秋の開園記念日でもあろうか。女教師たちの着物は、羽織なしで、素裕のように見える。ところで、この一枚の写真は、私どもに、実に様々なことを語りかけてくる。

### (1) 近代化のモノメントとしての園舎

例えば、彼らは、庭に面したベランダの階段に並び、前列の子どもたちは、地面に敷かれた絨毯の上に、正座したり、えんこしたりしている。

記念撮影にこの場所が選ばれたのは、こゝが、最もよく、附属



幼稚園を象徴する場所であったからだろう。明治九年に竣工したこの園舎は、二五〇坪に及ぶ平屋の洋風建築で、一段と「珍しく人々の目にうつった」と言う。

明治文明開化とは、大衆にとって先ず何よりも、「視覚世界的変貌」であったと言われている。<sup>3</sup>それは、支配層によって意識的に選択された近代化の指標である。政府は、建築の視覚的メディアとしての性格を鋭く直覚し、兵營と官立学校に、いち早くそれを適用した。附属幼稚園も、その典型例の一つなのだ。

「鹿鳴館」に先立つ五年も前に、こんな洋風建築が用意されたのは、単なる幼児教育への理解や情熱だけではない。それは、こうして、近代教育を積極的に推進しつつある「国家」なるものを、暗黙裡に伝達する視覚的メディアだったのである。

床が高く、ベランダ風の手すりについた廊下が園舎を特色づける。このベランダは、後の「鹿鳴館」にも設けられるのだが、幕末以来親しまれてきた、植民地風洋館形式の名残りである。ゴシック、バロック、或いはコロニアルスタイルなど、様式の如何を問わず洋風建築に附設されたのは、恐らく、象徴的な意味をにやなつたからであろう。それゆえに、幼稚園の記念写真も、こゝで撮影されねばならなかったのだ。

## (2) お抱え外人教師たち

後列中央に、一人の外国人が座っている。「音楽取調所」に招聘され、洋楽の指導に当ったH・メーソンではないかと思われるが、定かではない。氏の写真は、晩年のもののゆえか、この写真と似通ってはいるが、ビタリとは重ならない。

当時、本校で教鞭を取っていた武村耕靄の日記にも、「明治十五年一月三十日、メイソン唱歌の発表あり」と記されているが、たゞ、これと前後して、サンジョバンニなど、他の外人教師の動向も語られているので、外人教師との交流が頻繁だったことが浮かび上ってくる。従って、写真の外人が誰かということにもまして、当時の教育が、お抱え外人教師たちに極めて多く依存した、その証を見るべきであろう。

耕靄日記は、明治十二年の米国大統領グラント夫妻の来校をはじめとして、多くの外人貴賓の訪問を伝えている。この時代に、附属幼稚園は、国外へ向けられた「日本の顔」だったのである。

## (3) 山の手に残る鄙の面影

子どもたちは、袂の長短、袴の有無のちがいこそあれ、ほとん全員が和服。女教師も、教生と見える若い女性たちも、一様に、胸

をゆるく合わせて、ゆったりと着慣れた和服姿を見せる。服装界に、「視覚の近代」は、未だ訪れていない。

因みに、女子師範生が鹿鳴館風の洋服を着用し、正課の授業にダンスが加えられるのは、明治十八年である。子どもの洋服が、新聞や雑誌を賑わすのは、二十年以降のことである。

周知のとおり、当時の附属幼稚園児は、上流階級の子女が多い。にもかゝらず、この写真に見られる彼らの服装は、地味で鄙びている。袂が比較的長いのは、それが日常着だったからで、筒袖の流行は、日清戦争の後と<sup>4</sup>言う。要するに、彼らは幕藩時代の衣生活の名残りで、慎ましく、地方武士の子弟風に身を装うていたのだろう。

それにしても、子どもたちの動作や表情の何と幼いことか。広いおでこの下にちんまりとくっついた目鼻は、まるで赤ん坊のようだし、ちょこんと重ねた両掌や、袂を前に合わせた座りようは、よちよち歩きの嬰兒のそれだ。

そして、その表情の何と鄙びていることだろう。都会の子を特色づける神経の鋭さ、早熟な利発さは、どこにも現われていない。いまの日本なら、草深い山村でもなければ、容易に見出せない表情なのだ。

当時の山の手は、旧幕時代の武家屋敷跡に桑や茶が植えられ、

夜が更けると漆黒の闇に塗りこめられたと言う。神田川が清流で、「お茶の水橋」もかよっていない時代である。湯島の附属幼稚園まで、子どもたちは、水道橋を廻って通った。そんな中で、子どもたちは、ゆっくりと成長したのであろう。

体を動かしたり、後を向いている子どもが目立つ。恐らくは、シャッター時間のせいであろうか。乾板写真は、一八七一年に開発されている<sup>5</sup>。従って当時は、湿板法から乾板法へ移行期であった。後者でも、1/3秒というシャッター時間は、子どもらにとつて、長い緊張の時間だったに相違ない。

写真②は、比較対照の資料として揚げた。附属幼稚園の大正二年の卒業式の写真である。髪形、服装にもまして、目に著しいのは、彼らの表情の変化ではないか。三十年という歳月は、東京の子どもたちを、かく変貌させたのである。

\* 1 この写真は、「日本幼稚園史」(倉橋・新庄)にも掲載されている。

\* 2 右「日本幼稚園史」より引用

\* 3 「視覚の近代」(多木浩一、明治大正図誌2)

\* 4 「近代日本服装史」(昭和女子大学編)

\* 5 「日本写真発達史」(伊藤逸平)



◆ 編集部より

本年八十卷の二月号と三月号において、福西基、千羽喜代子の両氏に、定員問題の御執筆を頂きました。山下俊郎先生には、それらの雑誌が出る前に、原稿を依頼しております。どうか御諒解下さい。

## 遊びの意味

— 臨床教育学における

遊びの役割 —

E・フェルメール



本誌に論稿をお寄せ下さっているオランダ・ユトレヒト大学のフェルメール先生 (E. A. Vermeert) が昨年九月に来日されました。フェルメール先生は、これまでにすでに数回来日しておられ、日本に深い関心をお寄せになっています。本稿は、先生がお茶の水女子大学を訪問された折、学生たちに講義して下さったものをもとに、その後にもたれた座談会でのお話などを加えてまとめたものです。

今回は事例を軸にお話ししていただきましたので、親しみやすくお読みいただけるのではないかと思います。なお、参考として、先生の、これまでに本誌に所載されたものも併せてお読みになることをおすすめ致します。  
(国吉栄)

はじめに

今日は「臨床教育学における遊びの役割」と題してお話ししたいと思います。まずはじめに臨床教育学について少し説明いたしましょう。臨床教育学というのは、理論と実践が重なっている分野です。そこで、問題を持っている子どもに対して教育的援助が与えられます。ここで「問題」というのは、教育的関係における問題、すなわち、子どもと両親とのかわりにおける問題を



さしています。もちろん、子ども自身の持っている身体上、精神上のハンディ——目が見えないとか、精神発達に遅滞がみられるなど——のために、生活にハンディを持っている子どももいるわけですが、それは必ずしもここで問題にしているような、両親と子どもの関係に問題をもたらすものではありません。私達の日常生活において、例えば子どもが攻撃的になったり、あるいは黙って引きこもったりするために、大人の側としても、子どもと関係をもつことがむずかしくなるようなことがあります。また、退行という言葉で知られているように、子どもが赤ん坊のような行動をすることもあります。あるいは、言葉が自然に出ることが妨げられ、それが進んで吃音になることもあります。これらのことは一方的に子どもの側から発しているのではなく、両親のおかれている状況や、両親の子どもに対するかかわりからも生じてくる問題であると考えられます。これらの問題は、おそらく、子どもと両親の感情面の理解が相互にいく違っているということから発しているのではないのでしょうか。

私は特に子どもの遊びを通して、この教育学的問題を考えてまいました。遊びは意味のある行為であって、子どもは遊びを通して、日常生活の中で体験したことを表現していると考えることができます。つまり、遊びは子どもの、「世界へのかかわり」の

表れの一つであって、子どもの遊びを見、遊びの意味を知ることによって、子どもを知り、子どもの抱えている問題——世界との、両親とのかかわりにおける問題を知ることができるのです。

今日は実際の遊びを例に挙げて、子どもが自分の体験をどのように遊びの中に表現しているのかをみていくことにいたしました。そこから明らかにされる遊びの意味が、子どもと両親との通路になっていくのです。

### ピーターの場合・ジョンの場合

それでは具体例を通してこのことを考えてまいりましょう。今回は、ピーターとジョンという二人の子どもの例を取りあげます。

ピーターは四歳の男児で、排便のコントロールができなくなつて、赤ん坊のような行動をするようになってしまった、という理由で私どもの研究所に連れてこられました。ピーターの父親はすでに亡くなっており、ピーターは、母親と、まだ一歳にならない弟と三人で暮らしていました。ピーターの毎日の生活には心配なことがたくさんありました。お父さんが亡くなってしまったこと、お母さんは幼い弟の世話にかかりつきりなこと……。ピータ

ーは一人ぼっちの気がして心細く感じていたのですが、それを言葉にして言うことができませんでした。そういう感情を言葉にするには、彼はまだ幼なすぎたからです。おそらくこれらのことは、言葉になるようなはっきり意識されたものとしてピーターに体験されていたのではなく、一定の形をなさない、グニャグニャしたかたまりのような感じとして体験されていたのかもしれない。ピーターの母親にとっても「問題」は膨れ上がってしまいました。彼女自身まだ若く、夫が急に亡くなり、たった一人で二人の子どもを抱えて、「取り残された」ような気持でいたことでしょう。しかも、下の子どもはまだ小さくて手がかかるのです。そういう中で、ピーターが先に挙げたような状態になり、母親にとつて心配・不安が一ぱいに拡がった状態になっていました。つまり、子どもも親も、共に不安な中であつたわけです。

さてもう一つ、ジョンの例を紹介しましょう。ジョンは私どものところに来た時八歳でした。八歳の子どものもっている問題は、四歳の子どものもっている問題とは違っていると考えられます。ジョンの困難は人とうまくかわることができないところにありました。彼は両親とも兄とも、うまく関係をもつことができませんでした。外に出たい盛りの年頃でありながら、友達もほと

んどなく、一人で過ごすことの多い少年でした。普段はあまり口をきかないおとなしい子どもですが、時々急に気がワッと噴き出して暴れるのです。その怒りは特に兄に向かつて、そして両親に対しても向けられました。そういうことから両親が、私どものところに相談に來られたわけです。

### 体験の表現としての遊び

さて、私どものプレイ・ルームで展開された二人の遊びについて話を進める前に、「遊び」についての私の考えをお話しておく方がよいかもしれません。遊びは先ほども少し触れましたように意味のある行為であつて、子どもが日常生活において体験したことを表現したものであります。けれども遊びは単に現実をそのまま映したものではありません。現実において子どもが体験したこと、子ども自身にとつての意味を表現したもの、すなわち、子どもの内面の生活において起こっていることを表現したものです。日常生活は子どもに様々な色合いの感情を与えます。そして子どもはそれらの感情を現実生活においてよりも、遊びの世界において、いっそう自由に表現することができると感じているということを、私どもは理解しなければなりません。遊びの世界は現

実の世界ではありませんが、現実の世界は遊びの世界に影響を与えています。子どもが遊びの世界で表現することは、子どもの現実に根ざしているのです。遊びの世界は現実の世界ではなく、「であるかのような」世界、二重の世界、現実のかなたの想像の世界であるがゆえにこそ、子どもは、一つのものの見方をもつ世界の限界から解き放たれる可能性を発見し、自分の中で起こっていることを表現する自由を感じることができなのです。もちろん子どもは、私どもの言うような二重の意味、両義的な意味ということを意識してはいません。そしてもちろん子どもは、「あなたが実現したと思っていることは本当は遊びなのですよ」などと言って、子どもにそれを気づかせるなどのことはすべきではありません。

けれども子どもと一緒に遊んでみると、子どもは本当は、自分のしていることに気がついていることがわかります。例えば、子どもが遊びの中で攻撃的なことをしている時、その子どもは現実生活につながりのある何かを感じているように思われます。その遊びをもっと続けたいのに突然やめて、それまでのように遊び込まないで、表面的な遊びを始めたことがあります。そういう時、子どもはそこに何かがあることに気づかなければなりません。子どもはどうしても遊びを続けることができなくなっている

のです。子どもは自分が攻撃的になっているということ、また、今自分が遊びたいと思っていることはいやおうなく現実の何物かと結びつかざるを得ないということを感じたのです。そこが私どもが手を差しよべるべきところなのです。子どもが遊びを続けられるよう励まさなければなりません。私どもはそこで、子どもの中に起こっていることを理解しなければならぬのです。では遊びを続けるように子どもを励ます時、子どもの攻撃的な感情を、そのおもむくままに発散させてよいでしょうか。子どもは想像の中で攻撃的になるだけでなく、現実においても攻撃的です。現実は今、自分が使っているものを攻撃し、壊すのです。そしてそこに二つの世界の境界があります。そんな時には私たちは子どもに「お人形を壊さないでね。今度来た時に遊べないでしょ」と言って、それに気づかせます。

さて、子どもが表現している攻撃的なものは、子どもにとって実は悲しみの感情であることが多いのです。攻撃的な遊びは子どもに解放された安堵感を与える一方、それを見ている大人に、子どもがいかに悲しんでいるかを感じさせることがあります。子どもがそのように遊んでいる時、私たち大人は、子どもが自分を表現することを助け、子どもと共に遊び、そして今遊びの中で起こっていることについて子どもと話をすることが必要となります。

## ジョンの遊び

それでは先ほど挙げました事例にもどって、二人の子どもの遊びの展開にそつてこのことを考えてまいりましょう。まずジョンの場合ですが、ジョンは八歳の男児で、いつもおとなしい反面、時として攻撃的な行動をするという少年です。彼はブレイ・ルームに来ると、よく大小二つの軍隊を作つて遊びました。そして両方の軍隊を戦わせます。戦いはいつも激しいものですが、そうして遊んでいる間、彼は少しも楽しそうではありません。そしてついに戦いが小さい軍隊の勝利に終ると、彼はやっと、ほっとした様子になります。二つの軍隊が戦うと、小さく、弱い方の軍隊が勝利を取めるのですが、その戦いにはいつも大雨とか大雪がつきものでした。ジョンは砂を使って雨や雪を降らせません。彼は「雪が降ってきた」と言いながら、軍隊の上に両手いっぱい砂をふりかけました。時には「嵐だ」と言つて激しく砂をかけた時、時には水もつかつて大嵐を作り出します。それを見ていると、大きな軍隊と小さな軍隊との戦いの場面に、どんな問題が圧倒的な力をもっているのかがわかります。私たちはそこに、表現されたものの圧倒的な力強さを感じるのです。この遊びの中で、

彼は想像力を使って戦いの場面に大雪や嵐という悪天候を作り出し、それを水や砂を使って実現することができたのです。遊びの両義性の一つには想像力であり、もう一方は現実です。皆さんもすでにお気づきになったように、大きな軍隊と小さな軍隊の戦いは、彼の現実世界でもあります。彼は小さな子どもとして、兄に向かっているのです。

セラピーの初めの頃、彼は軍隊の遊びと平行して、人形を使つた遊びもしていました。彼は二つの人形に、Mr. & Mrs. Sand「砂」という名前をつけて人形の家に置きました。そこに砂夫婦が住んでいる、というわけです。そしてここにも吹雪がやってきて、その家を襲いました。この遊びの「砂」という夫婦は、現実の父と母でしよう。遊びの中で母親人形は看護婦の姿をしています。突然それが魔女に変身します。遊びの中で母親がたいへん複雑で矛盾した役割をもたされていることがわかりますね。その人形はお母さんであり、看護婦さんであり、同時に魔女なのです。一方、父親人形は警察です。けれどもこの警官は戦いを止めることができませぬ。そこで父親の役割も矛盾しているということになります。お父さんは警官だけど、力が弱くて戦いを止めることができない人、として現われているわけです。その後で両親と話したところ、母親は以前、彼が小さかった頃、実際に看護婦

をしており、仕事のために彼を一人にしておいたことがあったというのです。そして父親は現実には警察官でした。そして、少年のやさしさを求める気持ちを母親よりも理解することができましたが、母親はいつも父親にむかって、「子どもにはもっと厳しくしてください」と言っていました。このように両親の役割は子どもにとって矛盾した形で現われていたのです。

この困難な情況に陥ってそこから出てこれないでいるジョンを、私どもは助けようとはしますが、それはもちろん、「こうしなさい」とか「ああしなさい」というようにお手本を与えることであってはなりません。彼自身が自分でそれをしなければならぬからです。自分自身で表現を創り出すことが必要なのです。さて、想像力がどんなに創造的な働きをするのか、私どもは遊びの展開から見ることができません。彼は、いつも自分が使っている人形よりずっと大きな人形を取りました。それは魔法使いでした。こうして、彼は事態を明らかにしたのです。もちろん、それですべてが終了したのではなく、遊びは今も続いています。彼はそこにおいて、自分が求めているものに一つの方向を与えたのです。先ほど、子どもは遊びにおいて、一つのものの見方をもつ世界の限界から解放される可能性を発見すると述べましたが、それは、脅威や危険などの感情をひきおこす自由と同時に、それら

に打ち勝つ想像力を生み出す自由の発見でもあるのです。現実において、一体誰が自分に道を示してくれるのか、お父さんか、お母さんか。困難が僕の前に立ちはだかっているというのに。そこで彼は、強大な力をもつ生きもの——魔法使い——を創造したのです。

## ピーターの遊び

さてピーターの場合はどうでしょうか。ピーターの遊びはジョンの遊び違っていました。ジョンの遊びでは、想像力によって映像化されたものが非常にはっきりしていて、見ている者はそれを言葉で表現することができました。従ってセラピストは、そこで何が起きているかを子どもと話すことができましたし、子どもの方でも、「雪が降ってきた」などと言葉で表現することができました。ピーターの遊びは、想像力の映像化という面ではジョンの例のように鮮明ではなかったのですが、やはり想像力は働いています。ピーターは、先ほど申し上げましたようにトイレの問題がある子どもですが、この子どもは水と砂を混ぜて遊びました。皆さんの中で、水や砂に触った時の体感と、排便がうまくいかないということとの間に何か関係があると感じられる方があ

しょうか。

※ ※

砂も水も一定の形を持っていませんが、私たちはそれに触れることができませんし、見ることもできません。つまり私たちはそれらと非常に緊密な関係——身体接触——をもつことができます。私たちの身体の中で起こっていることすべては、私たちの身体が接触しているものと切り離すことはできません。これは私の考えの基本にあることですが、その考えはフランスの哲学者メルロー・ポンテ<sup>イ</sup> (M. Merleau Ponty 1908—1961) の影響を深く受けています。メルロー・ポンテ<sup>イ</sup>については御存知の方もいらしゃると思います。が、彼は、言語化されるものと、身体の中に深くあるものとは分けることのできない一つの全体であると語っています。私たちの外界との関係は、私たちの身体を通してなされるのです。従って私たちは、言語化された形で考えることからでなく、見ること、触れること、感じることから出発しているというのです。これは私の思想形成に重要な意味をもった思想の一つです。またもう一人、やはりフランスの哲学者、バッシュラル (Gaston Bachelard 1884—1962) の考えからも私は影響を受けました。彼によれば、私たちが物質に触ったり、物質を見たりする時に想像力がわき上がるというのです。彼は、物質と要素 (la matiere et

le element) という言葉を用いますね。

※ ※

さて、これらのことを頭において実際の遊びの場面をみてみるとどうでしょうか。おそらく私はそこで起っていることを正確に言い表わすことができないでしょう。けれどもそこで起こっていることを理解することは可能であると思います。ピーターはあまりしゃべらないで、水と砂での遊びに熱中していました。彼は人形をもってきて泥水の中に入れてよごし、次にはそれを泥水から出して水道の水をかける、ということは何度も何度も繰り返しました。セラピストはピーターのそうした行動をどう表現したらよいのかわかりませんでした。ところが遊びは人形の家にまで拡大されていったのです。ピーターは、人形の家の父親人形と母親人形を泥水でよごし始めました。それがあまりにも激しく攻撃的で、人形の家を壊さんばかりになったため、セラピストが止めに入らねばならないほどでした。セラピストはそれを説明することはできませんでしたが、ピーターの、よごしたいという攻撃的なまでの感情の強さを理解することができました。ピーターは、赤ちゃんを、両親を、よごしてしまいましたのです。

よごしてしまいたいという強い感情を表現した後、ピーターは自分の身体感情 (bodily feeling)——誰かのそばにいたいという

身体感情——をどうかしなければなりません。この時ピーターと遊んだセラピストは若い男性だったので、子どもは新しい可能性が生まれるだろうと期待していました。ピーターはすでに父親を亡くしていたために、父親との関係を発展させることができないうように思われていたからです。何回目からのセラピーの時、ピーターは赤ちゃん人形と哺乳ビンで乱暴に遊びはじめました。ピーターは、赤ちゃん人形を振りまわしたり、赤ちゃん人形の口に哺乳ビンを強引に押し込んだりしていましたが、セラピストの言葉によって励まされると、哺乳ビンを手にとって、今度は自分がその乳首を吸って、まるで小さな赤ん坊のようになりました。そしてセラピストのひざによじ登り、腕に抱かれて乳首を吸い続けました。そうです。ピーターは全く新しい、やわらかな態度を発見したのです。これは子ども自身による発見であり、言葉を使わないでなされた子ども自身の創造であると同時に、見捨てられているのではないかという恐れを克服しました。これを単に身体だけのことだと片づけてはなりません。人は身体を通して笑うことができ感ることができます。そして同じ身体から、攻撃も、やわらかさも、すべてが始まるからです。

ところで、プレイ・ルームでこのような遊びが続く一方、家庭では、母親との関係が変化していききました。それは、彼のより創

造的な面を示すものであると言えます。彼はトイレの問題も自分で克服していったのですが、それは子ども自身の中に創造的な能力があったということです。創造性は常に言語化され、形象化されることよってのみ明らかにされるのではなく、むしろ我々の中に存在しています。ピーターは、新しい表現という方法によって、家での自分のありようと母親との関係に解決を与えたのです。子どもはこのことを母親と話し合いました。母親は、そこには何かが起こっていることを感じ、安堵しており、また、子どもが以前より自分を受け入れ、自分も子どもを受け入れやすくなっていると話しました。母親の方にも、子どものやわらかな感情を理解し、それに応える用意ができていたのです。ピーターの場合、始まりは輪郭がはっきりしていませんでしたが、最後は私どもに、セラピーを終了してよいことをはっきりと告げるものとなりました。

### 子ども・両親・セラピスト

さて、御承知のように、プレイ・セラピーには三者の関係が含まれています。第一にはもちろん子どもです。子どもは、遊びの中で感情を表現することを通して、新しいものを創る可能性、言

い換えれば、世界に対する新しいかわり方をつくり出します。ピーターがセラピストのひぎにのって哺乳瓶の乳首を吸った、というのはこの一例です。これをフロイト流に言えば、肛門期から口唇期への退行行動であるといえるわけですが、しかし私どもは決してそれを退行であるとは考えません。そうではなく、限界を超える行為 (transgression) であると考えます。それは、一歩踏み出すこと、自分の抱えている困難——一つの限界——から一歩踏み出すことを意味します。そしてそこからやわらかな感情が出てくるのです。ジョンの場合でも同じことが言えます。彼は現実生活において、より大きなものを求めていました。そして何でもできる力をもった魔法使いを創り出したのです。魔法使いは、なぜ生きているのか、どちらに進んでいったらよいかを彼に示してくれるものでもありました。遊びの想像力を広げることによって、子どもは自分の意味を広げ、自分の可能性を広げることができるのである。

さて、子どもの問題は両親の問題でもあることは、すでに繰り返して申し上げたところです。これまで見えなかったが見えるようになることを求められます。両親にとって、問題を明らかにする糸口を見つけることは、時には困難なことです。それは、自分達をも含めた、子どもの錯綜した状況を理解することができな

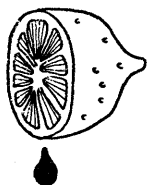
いたためです。そこにセラピアストの働きが必要となるのです。セラピストはいわば、「間に入る」という役割をもっています。セラピストは、子どもの遊びを助けると共に、両親に、遊びの中で何が起きているかを説明します。もちろんセラピストには遊びの中で起こっていることを正確に話すことができませぬし、想像の世界についても語ることはできません。それは決して容易な仕事ではありません。もし遊びの世界の意味と現実の世界との関係を理解することができなければ、理解しようとし続けることが必要です。セラピストは、遊びの象徴的な意味を日常の言葉に移しかえて (translate) 両親に伝える役割を持っています。両親は遊びの象徴的な意味を知ることによって、今まで見えなかったものが見えるようになり、子どもの中に何が起こっているのかを理解することができず。そして、そのことによって、今までとは違う行動をすることができるようになるのです。

皆さん、以上が皆さんにお話ししたかったことですが、お聞きになって、どんなことをお感じでしょうか。わかりにくい点もあったと思います。私たちはお互いに英語を母国語としておりませんので、ジャパニーズ・イングリッシュとダッチ・イングリッシュでこれからはばらく話し合ひましょう。

(訳・国吉栄)



## 1981年幼稚園展望



福田真理子

### 園児減少問題と職員の問題

#### 過員問題を中心に

戦後のベビーブームが去り、出生率減少に伴い、幼稚園ではここ一、二年、園児数が著しく減少していると言われる。実際に、東京都が発表した〇歳児の人口の移り変わり（表1参照）を見てみると、昭和四十六年に比べて、五十五年はなんと六万六千六百人減、九年間で約三割減少していることになる。

このように、出生率が減り、幼児の数が少なくなってくると、公・私立を問わず、幼稚園では園児減少の波がおしよせ、やむなくクラスを減らさなければならず、その結果として職員が過員になるという問題がもたらしている。核家族時代と言われる今日において、一件あたりの子供の数は、今後ますます減っていくものと思われる。

八十一年代の幼稚園を語るうえで、この

園児減少問題と職員の問題は、切り離すことのできない真刻な問題である。

### 公立・私立幼稚園別に

#### みた園児減少

ここで、具体的に東京都の発表した過去六年間の園数、学級数及び在園者数の推移を見てみたいと思う。（表2参照）

公立幼稚園の場合、総体数が昭和五十五年で三〇一園と、私立幼稚園の三分の一以下の数である。在園者も、この六年間横ばいで、著しい減少は見られない。ただ、園数と学級数が増えているので、一学級あたりの園児数を割り出してみると、昭和五十四年から減り始めていることがわかる。（図1参照）

私立幼稚園の場合は、園数が増えているにもかかわらず、在園者数が昭和五十三年から大はばに減少している。ということは一園あたりの園児数が減っているとい

表1 東京都・0歳児人口の移り変わり

(S46年1月1日～S55年1月1日)

年 度	人 数
昭和46年	204,283人
47年	210,227人
48年	207,850人
49年	204,126人
50年	190,292人
51年	169,333人
52年	159,801人
53年	151,328人
54年	145,139人
55年	137,683人

東京都発表

表2 公立・私立別にみた

園数・学級数及び在園者数

(S50～55年)

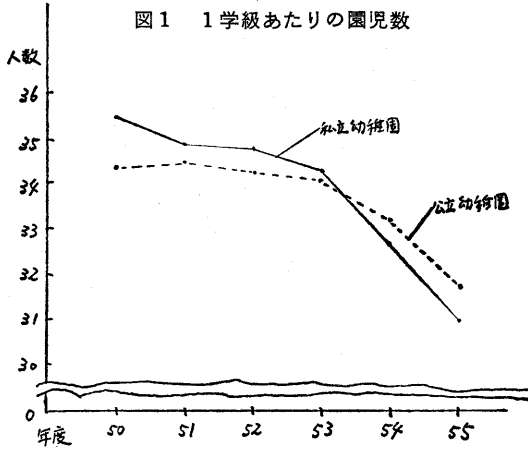
(1) 公 立

年 度	園 数	学級数	在園者数	1学級あたりの園児数
昭和50年	269	906	31,154	34.4
51年	277	960	33,141	34.5
52年	284	993	34,139	34.3
53年	290	1,023	34,884	34.1
54年	294	1,041	34,591	33.2
55年	301	1,053	33,409	31.7

(2) 私 立

年 度	園 数	学級数	在園者数	1学級あたりの園児数
昭和50年	1,077	6,922	245,826	35.5
51年	1,081	6,963	243,656	34.9
52年	1,087	7,005	243,884	34.8
53年	1,086	6,967	238,125	34.3
54年	1,090	6,854	224,403	32.7
55年	1,087	6,571	204,281	31.0

図1 1学級あたりの園児数



うことで、私立幼稚園は学級数を徐々に減少せざるをえなくなっている。ここで、おそらく職員の過員の問題が起こっているであろう。一学級あたりの園児数は昭和五十四年から急に減り始め、その勢いは公立幼稚園をしのいでいる。(図1参照)

公立・私立別に幼児減少を追っていくと、両者とも、その波を受けているが、私立幼稚園の方が更に問題が深刻であることが判明した。ベビブーム時代に、乱立された私立幼稚園のいくつかは、経営状態が悪化して閉鎖しなければならない状況に立たされていると聞く。また、園児数が著しく減少している地域は、各幼稚園の園児獲得合戦がくり広げられ、食うか食われるかのすさまじさだそうだ。

また、職員の過員の問題は、直接

生活がからんでくる深刻な問題だけに誰もが口に出したがる。ここで、八十一年代幼稚園展望と題して、この内部にひそんでいる重苦しい問題に焦点をあて、今後の展望、保育への影響とその対策まで触れてみたいと思う。公立・私立幼稚園を分けて取材した。両者の受けとめ方・立場の違いを読みとっていただきたい。

#### 公立幼稚園の場合(千代田区永田

#### 町幼稚園・園長に聞く)

まわりを官庁・オフィス・ホテル街に囲まれた千代田区立・永田町幼稚園は、四年前、区域外就学を打ち切ったからは園児の絶対数は減ったものの急激な園児減少はないという。今年度の園児数は、三歳十八名、四歳二十四名、五歳二十二名と、千代田区の定員の三歳二十名、四、五歳各三十五名を下回る数であったが、保育者の目的行きとどく恵まれた人数であった。ここ数

年、出生率減少に伴って、総合的な幼児数が減少しているのは事実であり、公立幼稚園でも大きな問題としてとらえている。また、婦人の職場進出が盛んになり、長時間保育のできる保育園に幼児が流れていくという現象も起こっており、下町の幼稚園では、ダメージを受けていると聞いている。

しかし、練馬区の幼稚園のように、区に唯一の公立幼稚園しかない所は、今だに数倍の倍率を記録しており、区の状態によりその問題は様々に違っている。

ただ、幼児数についていえば、八十年代後半には現在の四割位が減少すると推測されており、真剣に取り組まねばならない時代が来ているのである。

特に、園児減少に伴う職員の過員の問題は深刻である。東京二十三区においては、幼稚園教諭は教職員として保障されているので、過員になった場合、優先的に同一区内あるいは、空きのある他の区の幼稚園に

まわしてもらえませんが、地方の職員は市の理員となつていて、図書館勤務を命じられたり、保育園になつたりきびしい状況が起つていていると聞く。

職員についても、生活の問題や、働きたいという意志をまげなければならぬ立場におかれ、職員間の人関係も不安定なものになつてしまつておそれがある。

この過員の問題はたびたび園長会議において話し合われ、一学級あたりの定数を下げたらどうかという過員解消にもつながら対策案が都の方に出されているが、国の財政再建に伴つた予算縮小の方針にはずれる事として、取り上げてもらえない現状である。

小学校についていうと、今年度入学の一年生から、一学級の定員を四十人に下げ、定員減少を実行したが、職員を急増しなければならぬという予算の問題があつて、来年度から延期になつてしまつた。こ

のきびしい、行政の中で、過員の問題が解決されるのは、どのくらい先のことになるであろう。

一方、幼児数減少が、保育に及ぼす影響について考えてみると、一学級の園児数が著しく減つた場合、集団生活で望ましい社会性を培うという面では問題が起つてくるかもしれない。

そこで、年齢交差の保育の検討も実験研究として行なわれているが、その有効性については、まだ結論の出せるところまでは来ていないという現状である。

八十一年代は、幼児減少の問題と財政再建のしめつけが相対するきびしい年になりそうである。

#### 一 公立幼稚園職員に聞く

(千代田区)

過員の問題は、四年の保育歴の中で一度だけ経験した。園児の募集が切りが終わ

り、来年度は一学級減ることが決定した時、職員間でとても重苦しい空気が流れたように思う、というのは、全員が来年度も同じ園で働きたいと望んでいたからだ。そういう時は、公立幼稚園では同じ園に長くいる人から優先的に、他の区へ回るようになっており、結局はベテランの先生が同じ区内の幼稚園に移っていった。その先生は、多分心の中ではもう一年やりたかったんだと思うが……。ただ、私は保育歴が浅いせいか、過員に限らず、職場の移動の問題は、公立幼稚園においては特別大きな事ではないように思う。一つの園で固まってしまうより、様々な地域の職場を体験し、多くの子供達に出会うことは保育者としてプラスになる体験だと思ふ。ただ、家庭を持ち、自分の生活が固まっている職員にとって移動はたいへんな事のようにある。新しい所に行って、人間関係や地域に慣れるまで、やはり相当なエネルギーを要するか

らだ。今後、過員の問題はますます増えるであろうが、人事問題であるだけに、人数を機械的に調整するような解決策だけに終わらせないでほしいと都の行政に要望する。

### 私立幼稚園の場合（葛飾区の私立幼稚園教諭に聞く―保育歴十三年）

今から十七、八年前、ベビーブームの影響で園児数が急増し、方々で幼稚園が開設された。その当時は、保育の資格がなくても、土地・立地条件・人数が揃ったら、たやすく幼稚園が建った時代である。私の園でも、三クラスから六クラス、そして次年は八クラスと人数に合わせてクラスを増やして行き、現在は十三クラスとなっている。三年位前から、全国的に幼児数減少の傾向が始め、私の園でも毎年三十名ほどの割合で園児数が減っている。私立幼稚園は、やはり経営が成り立つ事が第一条件で

あるので、園長は、五十六年度に向けて、クラスを縮少する方向で、四名の希望退職者を募っている。園長の希望としては、経験給の高い勤続年数の長いベテランにやめてもらいたいようだ。幼稚園の運営をまかっている園長が、教育的な内容の大切さよりも経営的視点に立って動いている事は問題であると思う。そして、職員にいくつかの圧力をかけてきている。

そのひとつとして、職員の間には地位の差をつけることである。職員の待遇に差をつけることにより、職員間の連帯をくずし、職員間の人間関係を薄くしようという作戦である。

また、保育内容についても、技術を身につけて、地域に認められるようなめだだった保育をするように要求されている。力なき者は去れ！という園長のきびしい言葉に、職員達も何とか園長や父兄に認められようと、子供の発達段階を押さええないで、無理

な保育内容を子供に押しつけて、まわりに認められようと必死になっている。

このような保育者の状態では、とても理想的な保育など、追究できるわけがないと思う。また、私立の教職員の場合、多くの幼稚園が女性の職場であるにもかかわらず、有給休暇・産児休暇・生理休暇の保障すら行なわれておらず、子供が出来たら暗黙のうちにやめなければならぬ園とか、一方的に幼稚園の独断的労働条件で働いている職員がたくさんいる。

過員の問題なども、他の私立幼稚園の職員の横のつながりが全くない現状では、訴える場所もないままやめていく人がほとんどではないかと思う。

幸い、私の場合は「東京私教連」という、私立学校の教職員の組合に入っているため、過員の問題もそちらに相談している。ただ、現状では、葛飾区でも組合に加盟している幼稚園は四十二、三のうち、たった

のひとつという状況で、まだまだ組合の存在すら知らない人が多く、今後の課題になっていくと思う。

私の場合でいうと、幼稚園では、保育歴も古い方でふるいにかけられたら、必ず引かかる立場であるが、生活の面で働き続けていかなければならない状況があるし、働くのなら、今迄情熱を傾けてきた保育以外の職場に今更移ることは考えられない。また、保育そのものがおもしろく、やっと自分なりの保育を追究していきかけているところである。保育園に移る事も考えたが、公立保育園の年齢制限に引っかかってしまいだめだった。

今後、私立幼稚園では、幼児減少に伴う職員の過員の問題がますます深刻になっていくと思う。私立幼稚園は幼児獲得に血まなこになり、経営的には、職員の給与を減給し、職員の数もギリギリに減らざるをえない状況におかれ、地域によっては血み

どろの戦いになるのではないだろうか。

対策といっても、職員の立場で言うことであるが、私立幼稚園を学校法人化すれば、都や区から補助金があり、経営的には楽になると思うのだが、経営者としては、利潤減少につながるということではなかなかの要望を聞いてもらえない。

私達、私立幼稚園の職員は、いつ自分が職場を追われるかもしれないという不安を抱きながら、新聞の求人広告に目を通したり、就職情報雑誌を回し読みしている毎日である。

### 園児獲得合戦

幼児減少が進むにつれて、園児数が著しく減っている幼稚園では、実に様々な園児獲得合戦がくり広げられていると聞く。調布のY幼稚園では、昨年比べて三十四人の園児減少があったため、保育内容をより

多く父兄に理解してもらおうと公開保育を行なって呼びかけている。S幼稚園では、めだつ保育が必要であると考え、来年度から「漢字保育」を行なう計画をたてている。つまり、漢字を教えてくれる幼稚園というカラーを作り出したのである。

いなぎ市のK幼稚園は、団地に8ミリの映写機を持ち込んで、幼稚園の保育の様子を映写会で披露したり、教育懇談会を行なって、父兄との接触の場を作っていると聞く。

また、埼玉県の浦和にあるN幼稚園は祭事があると、園児の演奏する鼓笛隊を結成して町を賑やかにパレードしてデモンストラーションの効果をねらっている。それぞれの園で、アイデアを練って涙ぐましい努力している様子が伝わってくるようだ。

ただ、愛知の幼稚園で、職員が園児の家に個別訪問して申し込み料を取ってきて、その結果を職員室の壁に棒グラフで書き込

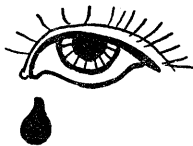
んでいき、その成績がポーンナスにまでひびいてくるという、ちょっとしたセールスマンの客取り合戦を思わせる行きすぎのところもある。

この現象をどのように受け取めたらいいものだろうか。教育という面からは、様々な批判が飛びかうであろうが、各幼稚園も、背に腹は代えられないというところであろう。

## 展 望

今後、園児減少問題はますます大きな問題として広がってくると思うが、現状では、実際に身にふりかかっている幼稚園が個別に戦っている様子がみうけられる。過員問題についても、自分の園に起こってはじめて、そのきびしさを痛感しているのが、現実である。特に、私立幼稚園は横のつながりがないなど問題の解決の糸口すら

見出せない。  
これらの問題を幼稚園全体の問題としてとらえ、今後の対策を練る必要があるのではないだろうか？



## 幼児が開いた“座談会”



赤羽美代子

私の勤務するR園の所在地は、東京港区の静かな高台に位置する。

区内には、区立25園、私立24園が存在する。区内の区・私立園の園児数は、この2・3年間に、共に著しく減少した。81年度には（4歳児）更に減少し、応募者数が一桁の園も少なくない。しかも、3園合わせて、やっと2桁という現実である。

R園は、一と昔前より、極度の園児の減少を見ている。理由は幾つかあるが、この地域の社会的な現象面から捉えるならば

- 10年来、地域の地区再開発の問題が進められ、園の周囲の家屋は、空き家となり、町民の居住者は減少した

- 近隣の各、小学校に幼稚園が併設された
- 園の周囲には、官庁街・各国大使館、又、長年の間に、大ホテル、高層ビル等が林立した。

以上のような問題を抱えた園であるが、毎年、区外より通園する園児が数を占め、

園児数は少ないが、結構、男女のバランスを保ち、幼児の為には良い人数であると、保育者は、ささやかな保育に励んでいる。

長年に渡る、小人数保育に馴れた者として本年度の極度の減少に、今更の驚きはないのだが、毎年、新入園児の募集時になると、私の脳裏に一と声はつきりと叫ぶ幻がある「保育内容を変えなさい。親の要求を入れ、勉強を教えなさい。園児数の獲得には、それが一番よろしい」

その叫びは、力ある者の如くに私を揺さぶって馳け足で去来する。そして、その事が成功した実例も、幾つか聞かせてくれる。幻は、時には姿を変え、趣向を変えては、幻なりの、幼児獲得とやらの、奥伝の秘法伝授に、私をしつこく追い回すのである。

そんな或る日、幼児の遊びの一つ一つの中から幼児が生かされる条件が、訴えられ語りかけられている、遊びの姿を見て、新しい感動を覚えた。



この幼児の「訴え」を、幼児が開いた座談会と仮定して、まとめてみようと思う。

司会者Ⅱ年長児A子。書記Ⅱ年長児B夫。

話し合い題。第一回「幼児減少についての保育の取り組方。幼稚園の今後の姿勢」

参加者ⅡR園児、年長組・年中組・年少組。全園児。

A子「皆さん、今日は幼児にとって、重大、かつ、深刻な問題として、緊急に集まっていたございました。3歳児のお友だちには、難かしい内容ですが、一生懸命に考え下さいね。」

しかしかの事で、R園も園児数が、年年減少しています。先生方も心配しておられます。私たちは、毎日こんなに楽しくR園で生活をしているのに、昨日、こんな話を先生にしていた人がいました。C夫さん、その話を皆さんに話して下さい」

年長児C夫「はい。幼稚園に来た業者のおじさんでした。先生に『保育内容に特徴をつけて、それを宣伝しなさい。当社は、素晴らしいワーク・ブックを開発しました。それは、押しつけずに、幼児が自発的に楽しく勉強する内容です。幼児には一冊ずつ持たせ、おかあ様には、それを見せながら相談ののつて上げれば、目に見えた成果が上がるので、喜ばれますよ』と、先生に話していました」

年中児D子「先生は、ワーク・ブックを使う事にしましたか？」  
C夫「いいえ。先生は断りました『保育内容は、今迄通り変えません。幼児たちは、遊びの中で工夫し自分で物を考え、びつくりするような事を発見しますよ』と話していました。おじさんは『先生、良く分りますが、これからは、それは理想ですよ。園児がいなくなりますよ』と云って帰りました」

年長児I夫「一体、私たちを、幼児獲得の道具と考えているのでしょうか？」

一同頷き、悲しい顔になる。

A子「あら、年中組のU子ちゃん、カイガンを裏返しに着てますよ」

U子「アハハハ。これで良いの」

年少児E子「どうして良いの？」

U子「脱いだ時、表になるからよ表に着るとき、脱いだら裏になるもん。そうしたら袖に手を入れて表に直している間に、皆が遊びに行っちゃうから」

E子「そーかー」と感心する。

全員、笑う「アハハハ」

D子「それ、誰が教えてくれたの？」

U子「うん脱いだ時、これが良いって、自分で考えたの」

年少児Y夫「僕のことね、Jちゃん打たなくなつたよ」

年中児M子「先生から『Jちゃん！物を打げないで』って云われなくなつたの

は、Jちゃんが良い子になったからなの」

注 II Jは年長児。男児。自己中心的な遊

びを好み、泣き叫び、物を打げて訴える  
(最近大分落ち着く) J自身が、友だちとの  
関わり方を知り、遊びの発展を工夫し、満  
足感が得られる経験を積むよう、教師は指  
導するさい、Jは将来、必ず、事態を正確  
に掌握し、決断をする能力が十分にある子  
と信じて(信じる事は、不可能と思う事を、  
待つ事と思う)「Jちゃん、Jちゃん」の  
名前の連発はせぬ事にした。現実のJは、  
落ち着いてきたとは云え、心の大騒ぎが、  
時どき破裂する。

しかし、子どもたちは、教師がJの名を  
連発しない事実を知って、これは「Jちゃ  
んが良い子に変身したからなのだ」と理解  
し、Jを認めた。Jは、友だちに誉められ  
た事で、顔を輝かせて、喜ばしさで一杯で  
ある。

教師は日頃、観念とか、論理とかいう方

法で、Jとの関わりが多くあったのかも知  
れない。対象であるJに即して問題を探  
し、頭でなく、身体全体の関わりが、まだ  
まだ、たりなかった事を反省する。

A子「先日、先生方と教会の幼稚園理事  
のおじさん、おばさん方と、今後の幼稚園  
の存続について話し合いました。私も出席  
しましたので、報告いたします。先ず、現  
在の幼稚園の実状が報告されました。次に  
。教会付属幼稚園は、従来の保育を変えて  
も、園児数を増す方針をとるか

。神様の御業の一端として園児が極度に減  
少しても存続するか。

を話し合いました。今後、その問題の話  
し合いが続けられますが、教会の願いと  
して、背後より、幼稚園の支えとなり、園  
は、ひとりひとりを大切にする保育に努力  
する「方針だそうです」

幼児全員、拍手。パチパチパチ。全員笑

顔。

年中児F夫「月謝も、だんだん高くなる  
のでしょう?」

年少児G子「パパとママが、お金が、し  
ゆくに、なくなるって」

年中児H夫「障害を持った子のおかあさ  
んが『月謝を皆さんより高く支払いましょ  
うか?』と先生に聞きました。先生は『皆  
同じに神様に愛されている子どもです。特  
別な月謝はいりません』と答えていまし  
た。それでも、全員、4月からの月謝は高  
くなるらしいですよ」

子ども全員「やっぱりー」一同頷き、笑  
顔消える。

A子「それでは、第1回の幼児座談会  
は、これで閉じます。近く第2回めの話し  
合いの会を開き、先生方や、幼稚園理事の  
皆様にも出席していただきましょう。私た  
ち、現実社会から外れた場所で生きている

幼い者が、厳しい社会の現実の中で、どう、生かされたいか、話し合いたいと思えます。皆様、御苦労様でした。

一同拍手。解散。(書記B夫)

この内容の一つ一つは、子どもたちの遊びの中に、滲み出ている。

幼児減少時代に入り、現実には厳しい。経営面が優先されなければ、その舟は出帆する事は難かしい。しかし、その一面のみで補えるならば、保育の内容を、歪めなくてはならぬ事態が生ずる。保育の理想を貫くとするならば、かなりの教師の決断と信頼と、実力が要求される。

しかし、どちらを選ぼうとも、常に変わらぬ対象者は、ひとりひとりの幼児である。保育者は、この一点を見つめて、何が起ころうと、「この事は、幼児にとって、何なのか？」に、戻していかなければと考え

ている。幼児獲得の為に、ひとりひとりをお利口にしたたりお行儀良くしたりする教育に力を入れて、結果的には、幼児が園の発展の為の材料に用いられる事のないよう、心せねばならない。

お行儀の良いマナーが、お利口になる事が拘わる相手が、「幸せを感じる」からという発想は、自分が受け入れられ、人間として扱われた経験を持った者が、そのマナーも、利発さも、生きて働く、行動になる事と思う。

これらの事態を踏まえて、或る時は揺さぶられ、或る時は、心、千々に迷える時、保育者は、原点に拠って立ち、しっかりと土台を見据えて、子どもを見る目を一とまわり大きくし、子どもの近くで、育てられていく保育者でありたいと願っている。

他に、幼児減少について、経営面からの御意見も、掲載されると思われるので、私

なりに、現場にある者として、最後まで貫きたい保育の姿勢を述べてみました。



## きびしい冬を迎えた私立幼稚園教育



高橋系吾

現在全国的に園児減少の状況が見られている。10%、30%と言うことで父母負担のみ頼らざるを得ない私立幼稚園の経営は危機に立たされている。

園児減少の原因はいろいろ考えられるが、主なるものは次のようである。

### (一) 幼児人口の減少

厚生省調べによる過去七年間の出生数は次のように報告されている。

昭 48	209 万 1,983 人
49	202 万 9,989 人
50	190 万 1,440 人
51	183 万 2,617 人
32	175 万 5,100 人
53	170 万 8,643 人
54	164 万 9,000 人

(推計)

昭和五十四年は昭和四十八年に比べて約四十五万人の幼児数が減少していることに

なっており、この減少の傾向は益々下降するところが予測されている。

### (二) 公私立の乱立

幼児教育の現状を見ると日本の就学前教育は図の如く複雑多岐にわたっている。

統一した行政機関によつていない為、適正配置が行われず、ばらばらの状態になつてゐる。

この為に必要な地域には出きず、不必要の地域に乱立する傾向がでてゐる。私立幼稚園間の設置は、私立学校審議会で調整されるが、公立幼稚園は教育委員会、私立幼稚園は知事部局と分れ、ある日突然私立幼稚園の隣に公立幼稚園が設置され、例えば新宿区の如く私立幼稚園三四園が半分廃園となり、このような事態が他の区市町にも起きつつある。

尚三歳～五歳児は幼稚園、保育所でも競

就学前教育の現状

小学校教育 5歳児 90%										
在家庭幼児 (未就園)	保 育 所				幼 稚 園					
	未 認 可 施 設	私 立			公 立	未 認 可 施 設	私 立			公 立
		個 人 立	宗 法・財・社 団立	社 会福 祉法 人立	区、 市、 町、 村		個 人 立	宗 教法 人立	学 校法 人立	市、 区、 村、 町

合が起きて問題になっている。

(三) 幼稚園より保育所へ

所謂「幼稚園ばなれ」という傾向である。働く母親が多くなった事から、短時間の保育より長時間の保育を望む傾向になった。

尚都会あつては家庭には庭(遊び場)がなく家(か)だけになり、外は交通の危険にさらされているので、少しでも長く園で預つて欲しいと求める傾向になった。

幼児期の教育は園での集団の教育と共に、家庭の父母による生活が人間形成の土台になることを理解しながらも生活事情が先になっているようである。

最近増加しつつあるベビーホーム等といわれる未認可の幼児施設では二十四時間の終日委託も多いと聞くと、これでは「親放れ、子放れ」となりその子の成長に不安を

持つものである。

(四) 園の施設、設備の不備

幼稚園教育の三要件は

- 施設、設備
- 教育内容
- 教師の充実

であり、このうちでも施設、設備の充実が強く要望されている。特に新設の公立幼稚園、公立保育所は行届いているものがある。

園の教育の歴史の長い事はよい伝統となつてはいるが、併せて施設、設備の現代化も急務である。

(五) 私立幼稚園経営のあり方

園児減少を防ぐ、唯一最大の道は「経営のあり方」であると考える。

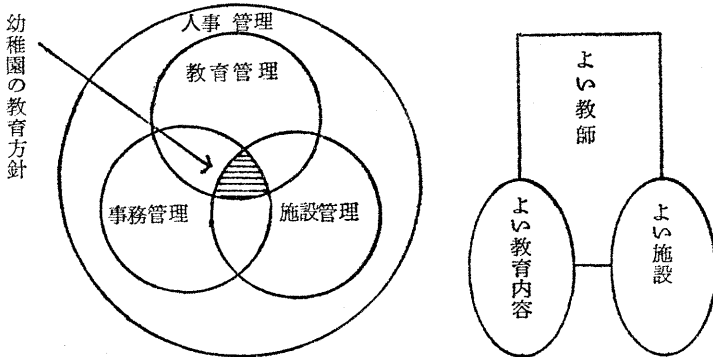
全国のいろいろな地区の実情を調べて見ると過疎地といわれ園児数が激減した園の隣接園が平年通り集り、過疎地域でありながら集まらない園もあることを思う時に父母が園の教育内容を調べて、評価し、選ぶ時代になったのではないかと考える。

園の経営は次の図のように、施設管理、施設管理、事務管理となりこれを人事管理がつつみこの重なりを貫くものが教育方針であると考えている。平凡の事ながら「よい施設、よい教育内容、よい教師」によって、良い教育が実現するものである。

園児減少の為に私立幼稚園はマスコミからいろいろの批判を受けている。

- バスの送迎合戦
- 入園の勧誘
- 幼稚園教育の特色競争（はだかの教育・茶道・唐手・剣道・文字・漢字・計算力・英語・体操の技術指導、等）
- 保育料の値下げ

### 幼稚園経営のありかた



等の批判に就いては謙虚に受けとめ、稍もすると日本の幼稚園教育は小学校志向型に走り易いことを反省し、西欧の如く家庭延長型と考え、「真の幼稚園教育とは何か」を衆知を集めて研究する時と考えている。

ある新聞の投書欄に次のような記事が記載されていた。

「おしえて欲しい本当の幼児教育」二十九歳の主婦であった。

わが家の長男は毎日一時間歩いて、一年保育の園に通っている。基本的な生活習慣を身につけることに重点をおき、できるだけ自然の中で、健康、安全で幸福な生活のため心身の発達を助長するのが園の方針である。

これは最高の教育と思っているがその反面、あちこちで英才教育がいわゆる昨今何か物足りなさを感じてしまう私である。……幼児期に最もふさわしい教育とは、いったいどのようなものなのでしょうか。」

全国にこのような父母が沢山いると考える時、幼稚園教育の特色をもう一度考え直す必要がある。

○ 幼児の発達に応じる（ひとりひとりをみつめる。）

○ 適当の環境を与える。（人と物の両面）

○ 生活経験に即する。（生活の中から見出す）

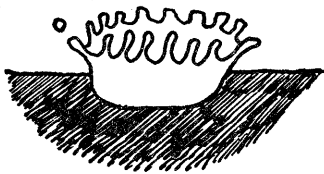
○ 総合的の指導を行なう（断片的ばらばらでない指導）

この四つの条件に合った指導こそ「ほんとうの幼児教育」と言えるのではないだろうか。眼に見える小学校志向の知識の教育を行なって頭がよい、物識り、利口そうよりも、眼に見えにくいものを育てる教育、引き出す教育によって、根気がよい、我慢する、やりとげる意志意欲の柱、思いやりがあり、無邪気、子どもらしく元気があるの情操の柱こそ今の幼児期に育て「少し位暑くとも、寒くとも、空腹でも、疲れて

も我慢する心」が、今後の成長に必要である。

このような人間形成の土台が出きれば青年の非行化は防ぐことができると思つており、このような平凡であつても本當の幼稚園教育に努力すべきことを反省している。

（道灌山幼稚園）



# 歴史人口学からみた生と死 四

## 鬼頭 宏

### 四、結婚

#### (一)

十六―十七世紀は、婚姻革命と呼んでよいほど大きな変動が、婚姻構造に起きた時代である。それ以前と比べて、結婚をしていく人の比率、つまり有配偶率が著しく高まったのである。

変化が始まる前の配偶関係を知ることが難しいが、寛永十年

(一六三三)に調査された肥後藩人畜改帳のうち、玉名郡伊倉の八ヶ村に片鱗を窺うことができる(皆川・一九六一)。

それによると玉名郡八ヶ村の一五歳以上人口の有配偶率は、男五八%、女七六%だった。男子の有配偶率が低く、また男女ともにかなり早婚だったと考えられるにもかかわらず、四五―九歳の未婚率がかかなり高い(男二二%、女九%)という特徴がみとめられた。

その原因は、世帯構成員の地位によって配偶関係に著しい差異があったことにある。家の継承線にある直系親族の有配偶率



(一五歳以上)は非常に高く(男八〇%、女八六%)、結婚年齢も男子は二五歳前後、女子は二〇歳以前と推定され、未婚率も低い。これに対して傍系親族および非後継者の有配偶率は男一八%、女六〇%と低いうえに、結婚年齢も高かったとみられる。名子・下人などの隷属家族の配偶関係はさらに悪く、有配偶率は男子でわずかに八%、女子でも一八%しかなかった。男女とも著しく晩婚であるうえに、三分の二は生涯、独身だったと推定される。

このように、人口再生産の主要な担い手が直系親族であり、傍系親族や隷属者の家族形成は制限されていたのが、より古い時代の婚姻構造である。そして人口に占める隷属者の構成比率が非常に高いことが、全体の有配偶率をさらに引き下げていた。隷属者の比率は玉名郡八ヶ村において一五%だったが、同年の肥後藩人番改帳によると合志郡一二八ヶ村では四〇%近いから、十七世紀以前にはいっそう有配偶率は低かったにちがいない。(鬼頭・一九七六)。

十七世紀から十八世紀にかけて有配偶率がどのように変化しかかを、信濃湯舟沢村でみることにしよう(鬼頭・一九七四)。十七世紀初期の肥後農村ほどではないが、この山村には十七世紀末期になっても譜代下人が多数存在していた。一六七五年には全世帯

表1 世帯内の地位別にみた配偶関係 (16歳以上、信濃国湯舟沢村)

分類		1675年				1771年			
		人数	有配偶	離死別	未婚	人数	有配偶	離死別	未婚
男	直系家族	100人	54%	7%	39%	135人	69%	8%	23%
	傍系家族	21	38	0	62	50	46	6	48
	隷属者	15	33	0	67	15	60	7	33
	合計	136	49	5	46	200	63	7	30
女	直系家族	76人	70%	9%	21%	129人	72%	22%	6%
	傍系家族	15	53	0	47	44	52	16	32
	隷属者	16	31	0	69	14	64	7	29
	合計	107	62	6	32	187	67	19	14

(注) (鬼頭・1974) による。

の三分の一に下人が抱えられていて、下人人口比率は一三%あり、平均世帯規模も九・〇人と大きかった。一世紀後の一七七一年には、下人を持つ世帯は五%、人口の七%に減少し、平均世帯規模も七・二人に縮小した。

こういう世帯規模と人口構成の変化を背景として配偶関係も変化した。表1に示したように、有配偶と離死別を合計した既婚率(一六歳以上)は男子で五四%から七〇%へ、女子で六八%から八六%へと、ともに一五ポイント以上も高まった。

世帯内の地位による差異はそのまま残ったが、隷属家族の自立と傍系親族の分家によって有配偶率の上昇は全国的に生じた。こうして十八世紀までに、人口の大部分が結婚を経験する社会が出現したのである。前工業化社会のヨーロッパには生涯独身ですごす男女が多かったのに対し、江戸時代の日本はそれが少ない、非西欧型の社会となった。

その結果、有配偶率を通じて出生をコントロールする社会的規制力は縮小し、結婚後の夫婦による調節が重要になった。江戸時代中・後期には、有配偶率と出生率の相関関係は小さくなる傾向が認められている。

(11)

有配偶率は結婚(初婚)年齢、離婚および死亡確率によって決定されるとともに、性比や年齢構成によって左右される。流行病や飢饉の時代には死亡率の上昇によって有配偶率は一時的に低下したり、経済環境の変化によって初婚年齢が早くなったり遅くなったりすることによって、若年齢層の有配偶率は変化しやすい。

速水融(一九七九)による十八〜十九世紀の濃尾地方四三ヶ村の人口観察によって有配偶率の地域差をみると、それが高いのは男子については沿岸新田村、女子では山間部だった。反対に都市部では、男女とも全体として低かった。

沿岸新田村は女子の有配偶率も高い方であり、新しい耕地の拡大が分家の排出を可能にしたことが、男子の高い有配偶率に結びついたのである。山間部において女子の有配偶率が高いのは、性比が高く、男子に対する女子の人口が少なかったためであると説明されている。なぜ性比が高いのか不明だが、人口制限が女兒の生育を妨げたのかも知れない。

都市部で男女ともに有配偶率が低いのは、就業機会が多く存在するために、多数の未婚男女が集まっていたからである。在郷都市である武蔵大宮郷(秩父、一七七一〜七五年)では、一六歳以上の有配偶率は男四一%、女五八%しかなく、同年代の湯舟沢村より二〇ポイント程度低かった。大宮郷には全人口の一七%を占

める奉公人がおり、すべて独身だった。男子においては労働年齢人口（二六～六〇歳）の二六％、二〇歳代では四〇％もが奉公人であることが、低有配偶率になって現われたのである。

南和男（一九七八）によると、江戸（渋谷・四谷・麴町）の五ヶ町における慶応年間の有配偶率（五町の単純平均）は、男（一六～六〇歳）五〇％、女（二一～四〇歳）五九％だった。

(三)

江戸時代の結婚はかなり早婚だったという通念がある。しかし女子に関してそれはあてはまるけれど、男子は一般に現代の水準に近かった。中央日本の農村の十八～十九世紀における平均初婚年齢は、男子で二五～二八歳、女子で一八～二二歳の間にあった。例えば次のとおりである（鬼頭・一九七八）（鬼頭・一九七四）（速水・一九七三a）（速水・一九七四）。

武蔵甲山村（二七九一～一八七二）男二五・五、女一八・三

信濃湯舟沢村（一七〇一～九六）男二七・〇、女二〇・二

信濃横内村（二六七一～一八七〇）男二七・三、女一九・四

美濃西条村（二七二三～一八三五）男二八・一、女二四・〇

都市部の初婚年齢も農村と変わりはない。秩父大宮郷（一七六四～一八四八年、三〇家系）では男二五・三歳、女二〇・六歳で

ある。一八六八～九年の宗門改帳から、女子三〇歳以後のケースを除いて得た大坂菊屋町の結婚年齢は、男二四・五歳、女二一・〇歳である。

初婚年齢には階層差が明瞭に現われ、しかもそれは女子において著しかったようである。美濃浅草中村（一七二六年以後出生、一八三一年以前結婚）では、上層農民（持高一八石以上）の初婚年齢は男二六・七歳、女二七・六歳だったのに対し、下層農民（四石以上）は男二八・二歳、女二二・六歳だった。男子における階層差は僅かであったが、女子では五歳にもなっている（鬼頭・一九七七）。濃尾地方六ヶ村（二六七六～一八七一年）でも、男子において階層間格差はほとんどなく（平均二八歳）、女子において上層（一〇石以上）一八・七歳、下層（二石以下）二一・一歳と二歳以上の開きがあった（速水・一九八〇）。

女子の初婚年齢にみられる階層性は、出稼経験の比率によって説明される。美濃西条村では、出稼経験の有無は男子の結婚年齢に有意な差を与えていない。しかし女子においては、経験者の二五・九歳に対して非経験者は二一・五歳と、四歳の開きがあった（速水・一九七四）。出稼経験者どうしおよび非経験者どうしでは階層差はないので、結局、下層農民ほど出稼経験率が高いことが、女子の初婚年齢に差異をもたらしたと言える。この村では地主層

の女子の初婚年齢は二一・六、小作層では二四・七歳だった。

男子において明瞭な階層間格差が見出されないのは、結婚のタイミングが女子と異なっていたからだろう。男子の場合、結婚は家の継承との関連で決定されたと考えられる。たとえば父親が六〇歳前後で隠居する頃までに結婚するというような、家族周期の一定段階が結婚の適期となったのではないだろうか。柳田（一九六九）は嫁入りをめぐって「婚姻と家に入ることとは以前全く別の事件であったこと、恰かも男子の縁組と相続とが、今でも二つの事件であるのと同じであって、もし何かの方式の之に伴なうものがありとすれば、それは縁女の新たに主婦となるの式であったたかも知れぬ」（一九二ページ）と考えている。「婚姻を結んで後もなほ生家に留まり、主婦の入用が生じて後、初めて夫の家に迎へられて居た時代」（九七ページ）があったというから、跡取りの結婚は嫁入に新しい主婦の入室は戸主の隠居年代と密接に関連していたはずである。

一方、女子が結婚する場合には、嫁として生家を出るのが近世には一般的であったから、結婚の時機は生家の家族労働力の状態や経済力によって決定される傾向があったと考えられる。「女の勤労の高く評価せられる階級では、自然に嫁入は出来るだけ遅く」（柳田・一九六九、一九五ページ）させようとする力が働い

ただろう。しかし他方では、人口再生産に必要な出生数を得るためには、二〇代前半で結婚しなければならないという、適齡の上限も存在していたのである。

どの社会でも、結婚年齢は社会経済的環境を反映して早くなったり遅くなったりする一方、出産回数を通じて人口増殖力に影響を与える。しかし江戸時代中・後期には、高い有配偶率を背景に、親の家族と家を継承する子の家族が同居する、直系家族が普遍的だったので、結婚は経済的独立と同義ではなかった。また、家の存続のために一定数の子を出産する必要もあったので、農民上・中層では、このような内部要因が優先し、外部要因の働く幅は西ヨーロッパ社会においてよりも狭かったと考えられる。

#### （四）

江戸時代の結婚はどれくらいの期間続いたのだろうか。婚姻は夫または妻の死亡と、離婚によって終了する。したがって平均余命が短い江戸時代には、現代より夫婦がいっしょに暮す期間は短かったはずである。離婚による中止を考慮しないで、結婚年齢と結婚時の平均余命から導かれる婚姻持続期間の期待は三〇～三五年である。

しかし実際に観察された一八一―一九世紀の婚姻持続期間は、ど

表2 結婚持続期間と解消理由 (信濃国湯舟沢村、1701~50年結婚コーホート)

理由	期間(年)															合計	平均年数
	1	2	3	4	5	6 } 10	11 } 15	16 } 20	21 } 25	26 } 30	31 } 35	36 } 40	41 } 45	46 } 50	51 以上		
夫の死亡	1	1			1	3	7	7	6	9	9	13	4	6	8	75	31.0
妻の死亡	3	4	2	1	1	7	4	11	4	4	1	7	3	1	2	55	20.3
夫・妻の死亡								1			1					7	43.3
離縁	9	5		3	2	5	2									26	4.0
その他・不明	3	2			1	1		1								8	5.0
合計	16	12	2	4	5	16	13	20	10	13	11	20	7	9	13	171	22.7

(注) 期間不明(22件)を除く。

こでも相当短かい。信濃横内村(一七五〇年以前結婚)の二七・七年は長い方に属し、同村一八世紀後半の二四・七年、秩父大宮郷の二三・四年、信濃湯舟沢村の二二・七年は中位の水準、濃尾地方一七ヶ村の一九・〇年、武藤甲山村の二〇・三年は短かい例である(速水・一九七三a)(鬼頭一九七四)(速水・一九八〇)。飛騨高山では九年(市外出生妻)ないし一年(市内出生妻)という極端に短命な婚姻の例もある(佐々木・一九七七)。

このような大きな地域差は死亡率の違い以上に、離婚率の水準に原因があるとおもわれる。婚姻終了理由のうち離縁の占める比率は、横内村(両期)一一%、湯舟沢村一五%、濃尾地方一七ヶ村一六%で、濃尾諸村の場合、妻の死亡または離縁を確実にできないケースも多数あつて、これを加えるとさらに上昇する。平野部農村や都市部のように、就業機会も豊富にあつて人々がより流動的な地域で、持続期間が短かいことも、離婚率の高さとの関連を思わせる。

湯舟沢村を例にとって結婚の行衛を追ってみよう(表2)。持続期間別にみると、わずか一年の場合がもっとも多く(一九%)、次いで二年が来る(七%)。五年以内に解消する場合は全体の四分の一を占めていて、平均的な持続期間を持つこの村でも、短命な結婚が非常に多かった。

持続期間五年以内の解消理由で最も多いのは離縁、次いで妻の死亡である。離縁は大部分が婚姻初期に集中して、一〇年を過ぎると離縁は稀になった（離縁の平均持続期間は四年）。したがって離縁率が高まれば、持続期間は著しく短縮することになる（この場合、離縁率が倍になると平均持続期間は三年以上短縮する）。

結婚後一〜二年の間の離婚確率が非常に高いのは、現代でも日本の特徴になっている。江戸時代に嫁の立場がきわめて弱かったことはしばしば強調されるが、湯舟沢村の場合、全てが妻の離縁だった。三年子なきは去れ、という俚諺もあるが、離縁の理由まで知ることができない。離縁した夫婦の一一組に出生経験があり、そのうち九組には離縁時に子どもが居た。九人の父すべてが子の一部または全員を引き取った一方、母が子の一部でも引き取ったのは二例にすぎなかった。

結婚後五年ないし一〇年以内に妻の死亡による解消が多いことも、江戸時代の特徴である。一〇年以内の妻の死亡は夫の三倍あるが、出産にともなう妊産婦死亡率の高さを物語るものである。

二〇年を過ぎると、反対に夫の死亡が増加するのは、妻の死亡率が下がって平均余命が夫を上廻るためである。こうして若い年齢層では妻を失なう夫が多く、婚姻の持続期間が二〇年を越えた高

表3 村内出生男女の離死別後の行動（信濃国湯舟沢村）

男（1685～1735年出生）					女（1685～1746年出生）				
年齢	再婚せず	再婚	合計	再婚率(%)	年齢	再婚せず	再婚	合計	再婚率(%)
21～25	0	5	5	100	11～15		3	3	100
26～30	2	15	17	88	16～20		6	6	100
31～35	2	13	15	87	21～25	2	9	11	82
36～40	5	12	17	71	26～30	4	7	11	64
41～45	2	10	12	83	31～35	5*	3	8	38
46～50	5	5	10	50	36～40	10	1	11	9
51～55	7	2	9	22	41～45	4	3	7	43
56～60	6	0	6	0	46～50	11	0	11	0
61以上	12	0	12	0	51以上	40	0	40	0
合計	41	62	103	60	合計	76	32	108	30

\*不明の1名を含む。

表4 夫および妻の出身地・婚出先

地 域			人数	出身地・婚出先 (%)						
				村内	2 km以内	2 } 4 km	4 } 8 km	8 } 12 km	12 } 20 km	20 km以遠
信濃・湯舟沢村 1675~1796	夫・妻	出身地	528	69	6	3	15	3	2	1
	男女	婚出先	561	65	9	8	11	5	1	1
武蔵・大宮郷 1764~1844	夫・妻	出身地	330	31	14	13	18	11	7	6
信濃・横内村 <sup>(1)</sup> 1671~1871	妻	出身地	687	44	31	14	9	2 <sup>(3)</sup>	—	—
美濃・西条村 <sup>(2)</sup> 1773~1840 (出生コーホート)	妻	出身地	260	18	24	35	19	3 <sup>(3)</sup>	—	—
	女	婚出先	195	24	18	23	20	15 <sup>(3)</sup>	—	—

(1) (速水、1973 a)、(2) (速水、1973 b)、(3) 8 km以遠。

年齢層では夫を失なう妻が多くなるのである。

離死別後の夫または妻の行動(再婚状況)は、離死別時の年齢によって異なる(表3)。村内で出生した男子では四五歳以前、女子では三〇歳以前に離死別した場合に、八割以上が再婚した。この年齢を過ぎると再婚率はごく小さくなって、男子は五五歳、女子は四五歳を過ぎると再婚は皆無だった。出産可能年齢の男女の有配偶率を高く維持する社会的要請が存在したのだろう。

(五)

配偶者をどこに求めるかは、当事者男女に限らず、家族にとっても、村落にとっても重要な問題だった。婚姻には労働力の授受、交換の意味があったからである。村落の自立性が高く、したがって閉鎖的で人々の交流範囲も狭い時代には、村落内部での縁組が多かっただろう。また人口規模が大きい集団ほど、その内部で配偶者を選択することは容易である。それとともに、表4に掲げた四地域をみると山村である湯舟沢村で内婚率が高く、平野村の西条村や在郷都市である大宮郷で低いというように、地理的條件も内婚率に影響を与えていた。

村内で配偶者を見定める機会は、日常の労働、祭礼、あるいは娘宿や若者宿などにくらかもあったろう。村外との縁組も、何ら

かの人的交流が行なわれた範囲に限られたと考えられる。農村では配偶者の出身地も村内男女の婚出先も、大部分が八キロ・メートル以内で分布している。徒歩でもじゅうぶんに日帰りで往復できる範囲である。大宮郷の婚姻圏はひとまわり大きく一二キロ圏までが主要な通婚圏となっている。都市では人口を維持するために周辺地区からの流入に依存する傾向があったことと、都市民の交流圏の広さを物語るものである。

江戸時代中期以降、出稼などを通じて人口の動きは活発になっていったが、農村の婚姻圏はやはり生産活動の場を中心とした、一定の生活圏内にとどまっていたと考えられる。(上智大学)

〔参考文献〕

速水融 一九七一 「東濃一山村の人口統計―恵那郡飯沼村正徳二年～慶応四年―」徳川林政史研究所『研究紀要』昭和四十五年度。

速水融 一九七三 a 『近世農村の歴史人口学的研究』東洋経済新報社。

速水融 一九七三 b 「濃州西条村の人口資料―安永二年～明治二年―」徳川林政史研究所『研究紀要』昭和四十七年度。

速水融 一九七四 「人口学的指標における階層間の較差―濃州西条村の農民―」徳川林政史研究所『研究紀要』昭和四十八年度。

速水融 一九七九 「濃尾地方の歴史人口学的研究序説―史料・人口趨勢・婚姻統計―」徳川林政史研究所『研究紀要』昭和五十三年度。

速水融 一九八〇 「近世濃尾地方農民の人口学的観察―四六〇〇組の家族復元を通じて―」徳川林政史研究所『研究紀要』昭和五十四年度。

鬼頭宏 一九七四 「木曾湯舟沢村の人口統計―一六七五～一七九六年―」『三田学会雑誌』六七卷二号。

鬼頭宏 一九七六 「徳川時代初頭の農民の世帯と住居」梅村又次・他編『数量経済史論集Ⅰ・日本経済の発展・近世から近代へ』日本経済新聞社。

鬼頭宏 一九七八 「徳川時代農村の人口再生産構造―武蔵国甲山村、一七七七～一八七一年―」『三田学会雑誌』七一巻四号  
皆川勇一 一九六一 「肥後藩人畜改帳の人口学的分析」『人口問題研究所年報』五。

南和男 一九七八 「幕末江戸社会の研究」吉川弘文館。  
佐々木陽一郎 一九七七 「江戸時代都市人口維持能力について」社会経済史学会編『新しい江戸時代史像を求めて―その社会経済史的接近―』東洋経済新報社。

Smith, T. C. 1977 *Nakakura, Family Farming and Population in a Japanese Village, 1717-1830*, Stanford University Press.

柳田国男 一九六九 「婚姻の話」『定本柳田国男集』第一五卷筑摩書房。



## 『幼児の教育』復刻記念懸賞論文募集

このたび、雑誌『幼児の教育』復刻を記念して、左記の要領で論文を募集することになりました。多くの方々が、優れた論文をおよせくださいますことを、期待しております。

### 〔記〕

一、第一期、第二期の復刻『幼児の教育』を素材として、独自の考察を試みたものであること。

一、応募期日 昭和五十六年九月末日まで

一、応募要領 ペン書き（またはボールペン）とし、四百字詰縦書き原稿用紙に四十枚以上百枚

以内。上表紙に「復刻記念懸賞論文」と朱書の

上、「論文題目」「姓名」「住所」「所属」を記入

しこと。審査は上表紙を外し、本文のみを対象

として行ないます。尚、名前入りの原稿用紙は御遠慮下さい。

一、賞金及び賞品 最優秀賞一名 賞金二十万円

二等賞 二名 五万円

三等賞 三名 一万円

参加賞 全員 記念品

最優秀論文は、本誌に掲載いたします。

一、問合わせ先及び応募先

〒112 東京都文京区大塚二―一―一 お茶の水女子大学附属

幼稚園内 日本幼稚園協会『幼児の教育』編集部

尚、電話での問合わせは御遠慮下さい。郵便でお願いいたします。

主催 『幼児の教育』編集部  
後援 株式会社コーディック

## 続・保育の中の小さなこと大切なこと⑥ 守 永 英子

毎年十二月にはいると、私どもの園では、おもちつきをする。

前日から、庭に、かまどを築いたり、もち米を洗ったりなど、準備が始まるが、子どもたちが参加するのは、当日、おもちをつくことと、お供えを作ることである。

子どもたちは、勇ましく、鉢巻きを締め、年少組は、お相撲さんと一緒に、年長組は、子ども用の小さい杵で、ひとりずつく。

そして、つきたてのおもちを、あんと、黄な粉と、甘辛の、三種類の味をつけて、おべんとうの代りにし、お供えを、家へのおみやげにする。

昼食のおもちは、年少組から、順番に配られるので、年長組は、かなり、おなががすくまで、待たなければならぬ。空のおべんとう箱に、三種類のおもちを、二つずつ配って、

「いただきます」をした頃には、いつもの、おべんとうの時刻

を、余程、過ぎていた。

五歳児のクラスだけあって、おながが空いた子どもたちの食欲は、驚くほど旺盛で、「お代りをちょうだい」の声が、あちらこちらから掛かる。

全部きれいに食べてしまい、追加を希望する人。あなが嫌いだからと残して、黄な粉と甘辛だけ欲しいがる人。甘辛だけを、何度も、お代りする人。いろいろな希望にこたえて、お代りの世話が忙しい。

中には、おもちが、好きではないらしく、初めに配られた分だけでも、残ってしまう子どももあるが、大勢で食べる味は、格別らしく、大抵の子どもが、二度、三度と、お代りをする。

忙しく、お代りを配っている私に、Hが声をかけた。「ほくも、お代りちょうだい。おしょうゆの」

入れようと思って、見ると、Hのおべんとう箱には、まだ、

三種類のおもちが、一つずつ残っているではないか。

「それ、食べられたら、また、あげましょうね」という私に、思いがけない、Hの答えが、返ってきた。

「これ、だめなの。ママに、おみやげなんだから。持つて帰ってあげる」って、約束したの」

私は、はたと困った。毎年、おべんとうのときのおもちには、幼稚園で食べるだけ、家に持って帰るのは、お供え、ということになっている。

Hの希望に添うことは、易しいが、お代りを待っている、Kの視線を感じて、私は、迷った。Hの希望を認めれば、Kを初めとして、他の子どもたちも、「おみやげに、持つて帰りたい」と言い出す可能性は、充分にあった。そして、皆が、Hと同じように、持つて帰れば、全体の予定が、狂ってしまう。このクラスだけが、勝手に、全体の計画を、狂わせることは、はばかられた。

「あら、困ったわ。このおもちは、おみやげの分がないのよ。お家へのおみやげは、みんなが作った、お供えなの」

他の子どもに、追加のおもちを配りながら、こう言って、Hの反応を待った。待ちながら、私の心は迷い、自分の気持ちの方向が、定まらないことに、焦りを感じた。

Hは、おみやげにしたい気持が、強いらしく、おべんとう箱のおもちに、手をつける様子もなく、もう、「お代りを、

ちょうだい」とも、言わなかった。

自分が食べたい気持を、我慢してまで、母親に、おみやげにしたい、というHの、強い気持を感じて、私は、子どもたちに、お代りを配りながら、Hのおべんとう箱にも、黙って、そっと、甘辛のおもちを一つ、入れてあげた。

Hは、はっと、意外そうに、私を見上げて、何か言いたげな様子をしたが、何も言わずに、おいしそうに、食べ、私も、その様子に、ほっとしたのである。

迷いつつ、選んだ、自分の動きであった。が、本当に、これで、よかったのだろうか。

お代りの、たった一つのおもちには、恐らく、彼の食欲を満たすには、ほど遠いものに違いない。しかし、満腹してしまつては、食べたい気持を我慢しても、持つて帰りたいという、「母親への思い」が、生きてこないように思われる。

では、たった一つの、小さなおもちは、どういう意味をもつていたのだろうか。自分の心に問うて、思い当った。

それは、彼の優しさを、肯定している、自分の気持の「証」だったに違いない、と思う。

生活の中の、ほんの小さな出来事である。が、その中で、自分の動きの意味を、問うてみることは、大変、興味深いものである。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

## 研究会に出席して

村石京子

五十五年十月二十八日に三重大学教育学部附属幼稚園で研究会が開催され、その会に出席させていただいた一人として報告文を書くことになりました。研究会のテーマは——子ども同士が言葉を交わし合う活動——というもので、どのような活動が展開されるのか私の関心を惹起するものでした。

その日のプログラムは、午前中の各組の公開保育が行なわれ、続いてゆき室で園長の植村稔先生の挨拶、副園長の牛場秀子先生のこの附属幼稚園の撮影記録を通しながら「今までの歩み」についての説明、そして本日の指導に関しての各組担任の先生方の指導経過報告や反省などがありました。午後からは研究協議会と、大阪市立大学の堀真一郎先生による「ニイルの教育思想と幼児教育」という講演会が催されました。

午前中の公開保育では、その数日前に芋ほりに行って収穫して来たさつまいもを材料にしたものが各組に見られ、さつまいもスタンプでつくったのれんや、表情豊かなかわいい芋人形が夫々のコーナーにおかれてあったり、また当日もその活動が引き続いて行なわれている級もありました。全体の活動としては、四歳児の級では、自分たちの掘ってきたさつまいもを使って、うれしさと真剣さを交えた表情で一生けんめい鬼まんじゅうを作っている様子が可愛らしくほほえましいものでした。五歳児級では、芋人形を作って夫々のグループ毎にお話をつくって発表したり、導入部分で教師からOHPを使って「カライモマンの話」を聞いたあと、グループ毎に話の統を構成し、それをまとめて発表するといったかなり高度な内容のものが見られたりして、やはり地域での指導的役割をとっておられる大学附属幼稚園としての在り方をあらためて認識させられるものでした。

そしてこの日は、同年齢学級による保育が行なわれていましたが、この附属幼稚園ではもう一つの学級、いわゆるたてわり学級と呼ばれている異年齢学級編成による指導の試みを五か年も継続してとりこんでおられ、その面での研究実践報

告が今一つの注目するものでありました。そのことについては、記録映写を通しながらの説明で、今までの歩みがどのようになされてきたか、いろいろな場面での異年齢学級においてなされる保育のねらいが、参加したものによくわかり、三歳児クラスではしばしばつき当たる問題も異年齢学級ではうまくこなされていくのを知り、私共の園でも明日からの課題にして研究していく必要があると考えさせられたものです。

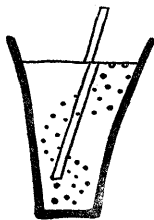
例えば、園外保育に出かけるときに見せる年長児の優しい、たわりの心や、年少児の持つ信頼感なども大切に育てたいものですし、伝承あそび、リズムあそびなども教師が指導の前面に出ていなくても、もっと自然の形ですんなりと子ども同士のおそびの中に入って行って、子どものものですることができます。また、園で収穫したそら豆やさつま芋の処理、分配の方法などは子ども同士で考えあつちえを働かしていく、それこそ体験を通して覚えていくものとなるでしょう。

勿論幼稚園の段階では、同年齢学級での子どもの活動は大切にしていかなければなりませんし、そのみに定着してしまいうのではなく、ある場面では異年齢学級編成の方が保育効果があり、着実なものとなる、この辺をよく考えて見なければ

ならないと今までの研究不足を反省させられる思いでした。

研究会は十月二十八日に一日開催されたわけですが、当日出席させていただいた者として受けた感想としては、三重大学教育学部附属幼稚園の三か年計画の研究実践の積み重ねが、この日に結実したものとして受けとめられました。これは勿論、園の先生方のはかりしれない熱意とその真摯な研究実践の努力の成果によるものと思いますが、なかんずくその足跡を見事に残し、それを当日の出席者に伝えることが出来たのはあの撮影記録によるところが大きいと思うのです。

私共の園でも、常日頃いろいろな記録を撮っておいて、自分たちの研究や反省の手がかりにしなければと話し合いながら、人手不足などが先行して仲々実践に移せないで過ぎていきましたが、やはり実行するこの必要性和大切さを痛感しながら帰路についたのでした。(お茶の水女子大学附属幼稚園)



クダケスタン・ジャポニ（イランの日本人幼稚園）③



進藤君枝

○イスファハンへの旅

テヘランの町の最南端のテヘラン駅から出発する夜汽車に揺られて、私はイスファハン（テヘランから約四二〇K南の古都）へ休暇のたびに旅立ちました。インド人の友人ピロー一家と過すためです。イスファハンまでは飛行機で一時間半、バスで七時間、汽車で十時間かかります。飛行機による移動ですと都市から都市

への移動でイランそのものを知ることができません。私はバスや汽車の旅が好きでした。旅の途中では多くの人々と出会えます。そしてたくさんの方のことを考え感じることができのです。果てしなく続く赤土の土漠の中を走り続けますと、広大なる国土、激しく照り続ける太陽……その中で自然と戦いながら生きている人々の厳しさを感じ、日本のように狭い国土ですが、太陽と水に恵まれ豊かな実りの中で生活できること感謝せずにはおられません。一日に一本イスファハン行きの汽車は夜出発します。九時近く

になりますと駅には荷物を両手にもてる限り手にしたチャドルの婦人とその一族が何組も押し寄せてきます。町から空港までのタクシーの料金でイスファハンまで行くことができます。発車の合図もなく夜汽車は出発します。乗務員がガラスの入れものに入った飲み水を配って歩きます。汽車は町をぬけ広大な何も無い土漠を走り続けます。テヘランの夜空は町の光があかるい為、星はあまりみられません。汽車の中からは無数の星がみられます。途中とまる駅の近くの民家の屋上では何かが動いています。雨の心配が全くない夏の間は戸外は絶好の睡眠の場なのです。ベットを持ち出したりゴザを敷いたりして屋上でねむるのです。十時間近く走り続けた汽車は前方に茶かっ色の山が連らなつた小さな小屋だけがたつたイスファハン駅に到着します。

イスファハンには美しいモスクがいくつもある古い都です。モスクの壁面は数色のモザイクのタイルがはりめぐらされ、イスラム教徒がひざまずき祈っている姿がみられます。

インド政府の派遣でイラン人に技術指導で来伊しているピロー一家は、毎回心良く私を受け入れてくれます。仕事で疲れ家族がこいしくなった時の私の安らぎの場がピロー家でした。

ピローのアメリカ人の友人が不思議な顔でピローたずねます。

「ピロー ミスキミエは英語もペルシャ語もしゃべれないではな

いか？ あなた達はなんの言葉で話しているの？」私の語学の力はその程度です。しかし言葉が十分通じ合えなくても心を通じ合うことができました。しかしもっと私の語学力があつたならばピローの家庭で出会ったたくさんの国の人々友達になれ多くのことを語り合えたのではないかとくやまれてなりません。

## ○再びテヘランに戻って

二週間の一時帰国のつもりでいた日本滞在が六か月になってしまいました。その間にパーレビ王がテヘランの地を離れホメニ師がテヘラン入りをしました。私がイランを離れる時には全く予想がつかなかったことが起こりました。

一九七九年六月、ホメニ時代に入ったイランへ、任期を半年残す私は戻りました。日本の報道機関によるとテヘランの町には、一般の人々の手に相当数の武器が流れ、治安が乱れているといわれていました。

新しい時代に入ったイラン空港は、民兵によって嚴重にチェックがされ、外国人の入国に対しては、特に神経質になっているようです。以前は空港の入口、ホテル、銀行、学校商店の店先などあらゆる所にかかげられたパーレビ王の写真はとりはずされ、そ

のかわりにホメニ師の写真がかかっていました。空港から町までの道路には、焼き打ちのあとの残がいや山や紙くずの山、又壁には、カラスブルーでかかれた革命標語等で、町は何かうす汚れてしまったようです。メインストリートの旧パーレビ通りも華やかな女性の姿は影をひそめチャドルをつけた女性の姿が目立ちます。

外国人が多く住んでいたナフト地区は、外国人がひきあげ夜になって明りがつく家はほんのわずかでした。スーパーマーケットの店主は、日本人が戻ってきたことを喜び、「外国人に対しては何ら被害を及ぼすことはないのだから早く戻ってきて欲しいと言っていました。幼稚園は在園児が六名になってしまいました。運営面のことを考え今までの園舎をひき払い学校の一部を借りて保育を続けることになりました。三歳児二名、四歳児三名、五歳児一名の幼稚園がスタートしました。

ホメニ時代に入ったイランでの私達の日常生活はほとんど以前とかわりありません。しかし夜になりますと時折りどこかから銃声がひびいてきていました。町ではホメニ師を長とした革命警備隊が町を守っている為か治安は思っている程乱れていません。休日には今までは下町の方でしか見られなかったチャドルをつけた家族連れの姿が山の手の公園でも見られるようになりました。ナ

フト近辺には定期バスが通るようになり、乗用車乗り入れ禁止地区なども生まれ庶民の生活に重点がおかれた政策がでてきました。

パーレビ時代に使用されていた教科書は廃止され新しい教科書が出来上りました。男女共学も小学校から禁止され西洋化はあらゆる面で否定されイスラムの原点に戻った教育がよしとされるようになりました。

テレビ番組にも変化がはじめ西洋の音楽はなくなりむずかしい顔のイスラム僧がコーランを教える番組がふえはじめました。ペルシャ語ではイスラム僧のことをモッラーといいますが、急激にイスラム化されてゆくことに反発する人々は最近のテレビはテレビジョンではなくモッラービジョンだと嘆く人々もあらわれてきました。

学校のバスの運転手のガンバリーさんは敬けんなイスラム教徒でした。「ホメニになったらイランはすばらしい国になるよ、もうじきホメニが我々の為に家だつて用意してくれるのだから……。王様とホメニは違い貧しい人々の味方なのだから、誇らしげに語ってくれました。私は熱狂的歓迎でホメニ師を迎えた人々の言葉を聞くたびに不安でした。自分達は何ら努力をせずとも彼等は全てをホメニ師が変えてくれるのだと信じ切っているのです。



ホメニ師を迎え新しい国造りを期待していた人々の中にも余りにも急激なイスラム化についてゆけず自分達の予想していた新しい国造りとは違った方向に進んでゆくのではないかと疑問を持ち始める人々もはじめました。

混んとする世の中の動きが続いていた時、おもいがけないアメリカ大使館人質事件が起りました。ホメニ体制に対して疑問を持ちはじめた人々をも含めイラン全土が反米感情でわき上ってしまいました。すべてアメリカが悪いのだ、カーターが悪いのだという考え方なのです。幼稚園のヤゴおじさんに「広島であんなにアメリカにいじめられた日本なのに何故あんなアメリカと日本は仲良くするのだ。」と聞かれた時はなんと答えていいかわかりませんでした。ヤゴおじさんの知識からいうとヤマハ、ナショナル、東芝位しか日本のことについて知らないおじさんの口から広島という言葉がでたのですから……。

六名ではじまった幼稚園が三〇名になりました。日本人学校も四〇名位になりました。人質事件で経済活動もストップしたままの状態でしたので今後は日本人の減少はあっても増加はないだろうと考えられていました。

一九八〇年三月、第十回テヘラン日本人幼稚園の卒園式を無事終え日本から新しい園長を招く準備を整え私はテヘランの地をあ

とにしました。

一週間で終るのではないかと予想されていたイランとイラクの戦争でしたが、終結の予想もつかず混沌の度を増すばかりです。

国内問題も複雑な問題を山程かかえているようです。旧パレビ体制のもとで抑圧されていた人々が自分達の力でイスラム革命を成功させたのです。そのゆくえは今の段階では予想もつきません。大国や外部からの圧力ではなくイラン国民の手によって自分達の国作りをして欲しいと思います。

イスラムの世界で三年間生活してもわからない多くの問題が山程ありました。ホメニ師が豊かになりすぎた物質文明を否定しイスラムの原点に戻り精神文明の必要を重じたことを物があふれ大切なものが失なわれてゆく私達の生活の中で私達が考えてゆかなくてはならない問題をなげかけているような気がします。

一日も早くイランの国に平和が訪れるように祈らずにはおられません。

(丁)



わたくしの

シルクロード ⑪

(最終回)

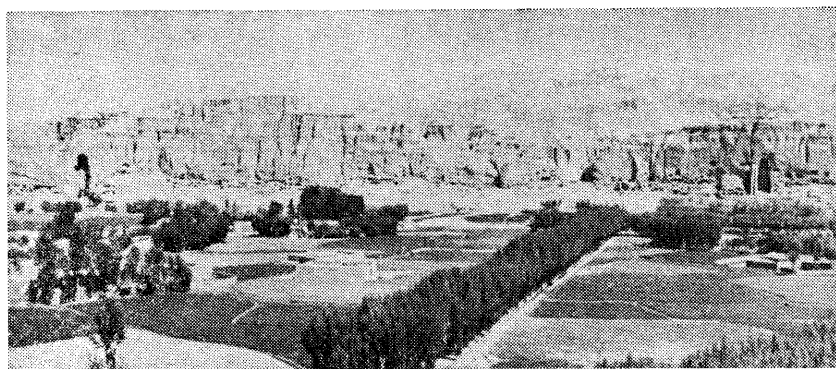
横張和子

## アジア絵画展望(その二)

中世を規定する年代の区分は歴史家によりいろいろ行なわれていますが、ここでは、キリスト教と仏教という二つの大きな宗教が興隆して、多くの人々の心をとらえ、その精神生活は大きく支配していった時代を一応中世とします。それゆえその時代に行なわれた芸術は宗教に奉仕するものとなり、絵画の分野でも宗教的な題材で占められました。そして、その絵画の技法が、いわゆる

鉄線描と隈どりの結合した法であったことは、いくつかの例で述べてきました。

アフガニスタンの首都カーブルから西に向って二四〇キロのバミアン峡谷にはその大断崖に高さ三十五メートルと五十三メートルの大仏が刻まれていて、世界的に有名です。紀元六二九年、この地を訪れた中国僧玄奘はその『大唐西域記』に「城の東北の山の阿くま(岡)の立像の高さ百四、五十尺のものがあ。金色にかがやき、宝飾がきらきらしている。この国の先の王が建てたものである。伽藍の東に鍮石くわうせき(黄金色をなしている石、黄銅鉱)の



▲ 図版① パーミアン峡谷全景 (アフガニスタン)

釈迦仏の立像の高さ百尺余のものがあると記されています(図版①)。中で五十三メートルの大仏をとり囲む大断崖の壁は紀元四、五世紀ごろと推定される仏、菩薩、天人の優美な壁画で壮麗されています。それは相当いたんで、痛ましい状態になっていますが、それでも顔料の色はなお美しく残っています。これらパーミアンの壁画にはイランの影響が強いといわれていますが、円輪形の構図を好み、幾何学的構図にまとめて、大規模な千体仏的配列をいたるところに示しています(図版②)。しかし基本的にはギリシヤ式仏教美術の絵画ですから、仏、菩薩、天人といっても、古代ギリシヤ・ローマ彫刻にみるような堂々たる量感のあるトルソや美しい整った顔をした人物像が姿態、身振りも優美に自然な姿で、奥行のある空間の中に納つています。ただ基本的なデッサンが少しく定型化しているのです。たとえばギリシア流に肉体や衣襲の立体感をだすために、明暗調を用いてはいますが、それが定まってしまつて、陰の部分の色調は隈どりに近くなつていくことです。さらに、明陰色調を中心に描かれる純然たるギリシア古典絵画では見られない鉄線描の輪郭線が全身を包み、目・鼻・口などの細部を、また衣の細かな部分を記しています。このような線と明暗色調の併用という様式はすでにお話ししてあるところですが、これは仏教絵画においてばかりなく、西洋ロマネスク絵画



▲ 図版② 円文千仏図

▼ 図版③ ビラセカ（スペイン・カタ  
ルニア）12世紀



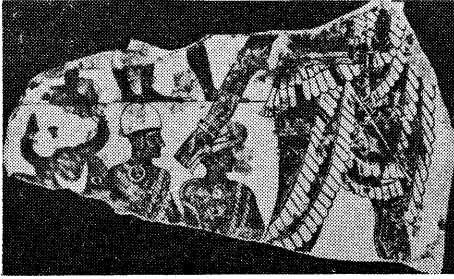
でも同様の原則から出発しているのです（図版③）。

イランとシリアの国境に近いアブ・カンラルより北西一キロのテル・ハリリの前サルゴン王の時代（前三〇〇〇年）の遺跡で、前一六七〇年、バビロン第一王朝のハムラビ王の攻勢によって落城炎上したマリ王宮の遺址の壁画の一部「犠牲奉獻図」をみてみましょう（図版④）。犠牲とする雄牛を曳いていく人物とその後方に上下二段に描かれる行列の人物群とが部分的にみえています。ところでその描法ですが、顔は側面描写で、上半身は正面観で、それはエジプトの古代絵画と同じです。いずれも顔料を厚塗

りし、さらに黒色の線輪郭をくくり、細部も同様の線で描いています。このような描き方、様式は、今日わたくしたちが手にするトランプのカードの彩色や図柄の方式に端的にみることでできるでしょう。ここでは明暗色調による立体感もなければ、空間の奥行観、遠近観もなく、ただ平面的に絡を作り、あざやかな強い色彩を平塗りして、鉄線描で形を囲み、細部を記し、表わされる人物像は一定の型にはまって硬直しているというスタイルです。これはすなわちブリミティヴ絵画という種類にみられるもので、原始美術の特徴ですし、幼児の絵もそうです。しかしこの種類の絵

画がときとして、きわめて迫力のある表現を示していることは、しばしば体験するところです。近代絵画、特にゴーガンやナビ派の画家たちは二次元的な絵画、原色の使用を主張し、マチスやピカソも原則的には、この近代プリミティブ様式に従って制作しているといえます。

これに対して、人体の自然らしさを写実的に描き出し、そのために明暗調を用いて立体感をあらわし、構図には合理的な遠近関係に従って、人物諸物を配置するという絵画は古典期のギリシア



▲ 図版④ マリ（シリア）王宮址出土壁画  
「犠牲奉献図」断片  
紀元前3000年 バリ・ルーヴル美術館

人がはじめて創り出した様式です。このギリシアの古典芸術は写實的に人間や自然の外観を示すばかりではありません。それはひとにギリシア・ローマの彫刻にみるころの古典的な人間の表現こそ中核なのであって、すなわち、人間の心理や精神の内容を理想的な水準で表現しようとし、また可能としているのです。それは強烈だが単純で、生一本な神秘的な精神しか表現できないプリミティブな神々の像とは異なっています。

ギリシア古典期の芸術においてはじめて、人間の豊富で複雑な精神的な内容を高尚で、普遍的な形式で表現する術を知ったわけですが、これはヘレニズムとして、やがて水面に生起った波文が周囲に拡大していくように東西に波及していきます。しかし芸術における古典様式はそれが及んだ地域で、すべに理解され、受容され、摂取されて各自の民族の伝統となったではありません。多くの場合、それは古くからあった民族の伝統、古典様式に対してプリミティブでもいうべきものの強い抵抗、排撃に出会うのです。そして激しい相克の挙句に受容と定着があったのです。

図版⑤は一九二〇年、エウフラテス河に臨むドウラ・エウロポスの遺跡の発見の端緒となった古代絵画、つまりここに駐もしていたイギリス軍が、回教徒の叛乱に対して、機関銃陣地を構築しようとしていたその工事中に偶然に発見されたのですが、それは



▶ 図版 ⑤

パルミウ神々殿の内陣、南側壁面に描かれた大画面で、今、ダマスカス国立博物館に移されて、「コノン一族の供儀図」といわれています。マケドニア系の有力な市民コノンとその一族が二人の神官により犠牲を捧げるために浄めの式を行なっている場面とされています。左端が主人コノンで、その右方に純白の長衣を着え、尖った帽子をかぶり、左手に二つのナイフをのせた血と水壺を持ち、右手を拝火壇の方にのぼして立つ神官、それに続いて、これは前の二人とは描法を異にした、つまり輪郭線のない没骨風に描かれた神官と、人物が並列的に描かれています。コノンとその右

の神官の背後にはローマ風の建築が描かれています。人物はどれも正面を向き、目を見開いて、敵愾な、極めて精神的な表情をしています。正面観の硬直した姿勢を反覆し、右脚を横に流すようにして、定型的な形で立っています。顔や衣の襷の表現では明暗の調子をつけていますが、それによって衣の下の肉体をあらわそうというのではありません。ここでは肉体をもって精神をあらわそうとする意図はないのです。背景の建築の描き方ではかなりな写実性を与えています。それを人物との空間的な位置関係では統一を欠き、遠近法への配慮もみられません。この壁画の年代はコノンの活動期からみて、紀元七五五ごろまでには完成されていたのであろうと考えられています。ヘレニズムの影響下にあったトウラで、このような精神的な、モニュメンタルな効果をもつ様式が出現していたことについて、R・ギルシュマン氏は「最も強力なパルティア芸術の特色を示すもの」といっています。つまりヘレニズムとメソポタミアのセミティックな（セム族の）伝統の流れの交叉点に立って、なおイラン的な原理に固く結びついている様式ということ。附言すると、両脚のつま先をやっ立てて、正面向きに開いて立ち、中心的人物を中にしてその見側に並列して立ちならぶ人物像の描き方はラヴェンナのサン・ヴェターレ寺のモザイク画の系統につながるギリシアのサロニカの聖、デメ

トリオス寺の「聖デメトリオスと寄進者たち」に、また西域クチャのキジールチ仏洞の壁画に見出せます。メソポタミアの側の中心に東と西のそれぞれの宗教画の中に、共通の様式で見出せる好例で興味深いところです。

図版⑥はパルミラの墓室におかれていた彫刻です。一目みればローマの肖像彫刻を思わせます。事実パルミラの遺構はローマ皇帝ハドリアヌ（在位一一七―一三八）によるところが大きく、パルミウがきわめて親ローマ的であったので、その芸術がローマ風（ヘレニスティック）であっても不思議ないのですが、しかし造



▲ 図版⑥ パルミラの墓室  
2～3世紀

形的にはもはやギリシア・ローマの古典様式とはよほど質を異にしています。どれも正面観をまもり、目を大きく見開いてその上きわめて真面目な表情をしているのが特徴です。衣服の髪はゆったりと豊かな流れをみせていますが、衣褶独特のふくらみのある曲面はそのなだらかな推移を棄てて、平らな面となり、面と面の間には溢が生じ、眉・眼瞼・瞳孔など細部もひたむきな線彫りで刻み込んでいます。それは多様な人間的な感情を強烈に盛り込んだローマの肖像彫刻とは異なった生一本な精神なあるいは神聖なという表情が強調されています。ヘレニズムの中核である古典様式はギリシア文物愛好の風潮の強かったパルミラにおいてさえ、オリエント固有の様式に抗い得ないものであったことを示す好例といつてよいでしょう。

再び絵画にもどりますが、暈調彩色というのがあります。ことに仏教関係の建物や器物の装飾で行なわれています。わたくしも子どものころです、法事のためにお寺さんに連れられていき、読経の間、所在なくて堂内をみまわしていますと、目に入るのが、独特な彩色の模様でした。朱、緑青、紫、紺青白といった色が濃淡の層で塗り分けられている華麗とも重々しいともつかぬ賦彩法で、実に不思議なもののようにみえたことでした。これが後になつて、わたくしの美術史の課題になるとはそのときは、思つても



▲ 図版⑦ ラブラの手写本挿絵

みなかったことです。暈網とはぼかしのことですが、このような賦彩法の源流はオリエントにあるようです。北メソポタミアのザクバの修道院で紀元五八六年、その修道僧ラブラが手写した聖書の挿絵は周囲に枠が作られ飾られています。その彩色の暈網彩色が用いられています（図版⑦）。これはヨルダンとの国境に近いイラク・ムカイヤットなど、近東の方によくみられる床モザイクの彩色をとり入れたものといわれています。これはモザイク画でよくみるところですが、色の明暗調のなだらかな自然な推移

を排して、色面に固定して扱えようとする、さきのバルミラ彫刻にみたと同じ手法が、絵画の領域でもとられているのです。それは移ろいやすさは否定され、不動な、確固としたものの方がより宗教的な意義に適うものであったからでありましょう。前回に述べた西域出身の画家尉乙僧が得意としたという凹凸花文ものような暈網彩色されたものではなかったかと考えます。

陰影法が色面的な濃淡の層を重ねてあらわすようになると、肉身の丸味を表現する方法はやがて京劇や歌舞伎の役者が作るような隈どりにになっていき、最終的に赤い線描になってしまいます。その前段階として黒色の鉄線描で輪郭を描くと、それに平行させて朱線を描きそえるという手法をとるものもあります。西域画にはその例が少くありません、キリスト教絵画の中にも少なからず見出すところです。

ヨーロッパの中世ロマネスクのキリスト教美術では古代ギリシア・ローマの様式をほとんど完全なまでに拒否してしまっています。それはオリエントの強い描線をとり入れ、原色を平らに強く塗り、輪郭をくくって、荒々しいほどの平面的なブリミティヴな様式としてしまっています。そのため古典的な豊かな均整のとれた表現はとり除かれてしまっていますが、代って単純強烈な表現形式となって、人々の熱い信仰の気持にびったりとくるものにな



っています。それは東京芸術大学所蔵の古因果経の挿絵のあざやかな色彩にも共通します。

わが法隆寺壁画はこれらに比べれば、人体ははるかに自然の形に近く、立体感も重量感も充実し、空間の奥行感もそなわっています。お顔からはわれわれの知的理解が及び得る精神的な思惟の相をうかがうことができます。強烈だが神秘的でとらえ難い原始の神々とは異なったものです。仏教美術がギリシヤ式美術として、西北インドのガンダーラの地に発祥したとき、アジア人は独自の民族的な固有の伝統を持ちながら、しかしヘレニズムの古典様式でよく理解し、そこに東方化されたものであれ、アジア的な古典様式が成立していったことが示されています。わが法隆寺壁画はさらに、世界的水準での宗教絵画であったと考えられ、それが今日失われてしまったことは、返す返すも残念ですが、その様式的系譜はその後の日本絵画の核となって生きつづけます。

二回にわたってアジア絵画展望などといってやや大それた主題でみてきましたが、それはアジアばかりでなく、西方のキリスト教絵画と深くかわり合う共通の手法をもつことでした。すなわち鉄線描と隈どりの法でした。それがどのような背景で生み出され、また用いられたかをみてきました。それは東西を問わず、また時代のずれ、あられ方々の軽重の度合などの相違はあっても、

共に共通し得る現象であったことでした。ただ、中世ヨーロッパで古典様式が完全なまでに払拭され、その合理性や典雅な様式が排除されてしまつて、復興には十世紀に至るまでまたねばならなかったのに対して、東アジアではその固有な伝統様式と抗いながらも、終極的には理解され、その民族的な伝統の中にとり入れてそこに豊かな感情移入的な芸術を創り上げていった点では、東西の両者に相異があるといえます。しかし宗教画という範疇では鉄線描と隈どりは積極的な役割を果していたこと、またわれわれの周辺にも今日見出し得る特質でもあると思います。

十一回にわたって「わたくしのシルクロード」をご覧いただきまして、まことにありがとうございました。シルクロードは絹が運ばれた道ということですが、宗教も芸術もその道を運ばれました。今は流砂に没して、かつての繁栄をみることはできませんが、すでに廃墟となった遺跡から、古人の息遣いまで伝わるような品々ができています。そのいくつかをご紹介してきたと思います。わたくし自身、絹の道といった絹織物そのものを調べる仕事、この後にも続きます。

(終り)

四月。桜の花が咲き、散り、そして、色々の花が咲き乱れる、生命の息吹を感じる希望の月である。

ことしの四月は、幼稚園によっては、すこし寂しい思いをしているところがあるかもしれない。日本中、幼児数が減少しているから、入園者がいつもの年よりも少なくなる計算である。地域によっては幼児をもつ人口は異なるから、その程度は園によって異なるであろう。幼児が減っているところも、そのやりかたが悪いのではなくて、社会変化によることなのだから、いたずらに自他ともに責めるのではなく、広い視野の中で認識し、考えてゆく問題である。

幼児数の減少ということは、社会にとっても、人間自身にとっても、幼児教育にとっても、いろいろのことを考えさせる。幼児という、楽しく無邪気な時期を過している子どもが減るといふことは、街からも家の中からも、子どもの笑い声

が少なくなることである。大きくなって、幼児の心の明るさを失わないようにしてゆかないと、社会全体が生気を失って暗くなってしまうかもしれない。

個々の幼稚園にとっても、変化が生じてくるだろう。いままで普通の幼稚園に入ってこなかったような子どもも、幼稚園に入ってくる傾向は一層促されるだろう。このことは一面よろこばしいことであるが、能力も性質も違う子どもたちが一緒に楽しんで生活できるような保育を考えていかないと、幼稚園が、子どもに余計な精神的負担をかけることになる。

また、大きな幼稚園が子どもを集めることに奔走するようなことは、幼稚園全体のバランスをくずすことになる。この際、クラスの人数を減らすことを工夫して、幼児期を楽しんでゆつくりと、ゆるやかな、健全な保育をとりもどすことがたいせつであろう。

(津守)

## 幼児の教育

第八十巻 第四号

四月号

◎ 定価二七〇円

昭和五十六年三月二十五日 印刷

昭和五十六年四月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

111 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

◎ 本誌御購読についての御注文は発売所  
所 フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。

# キンダー **“科学する心”を育てる教材** 科学教材シリーズ

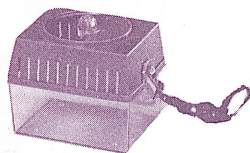
★ 1セット(年間12点)4,200円 ★ 1点350円

● 4月以降、毎月お届けいたします。

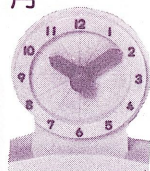
4月 **さいばいセット**  
あさがおのためつき



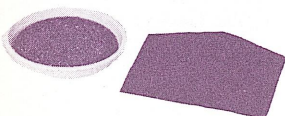
5月 **かんさつケース**  
(虫かご兼用)



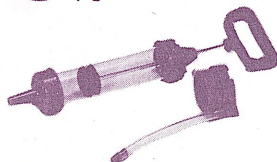
6月 **とけい**



7月 **そくせいさいばい**  
かいわれだいこんのたねつき



8月 **みずてっほう**



9月 **ふね**



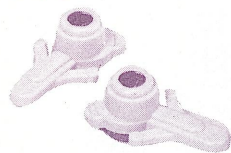
10月 **みずさいばい**  
ヒヤシンスきゆうこんつき



11月 **まんげきょう**



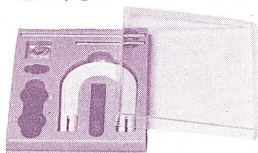
12月 **いとでんわ**



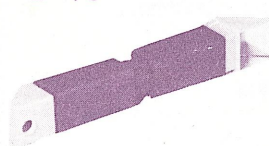
1月 **はかり**  
おもりつき



2月 **じしゃく**



3月 **かがみ**  
(せんぼうきょう)



くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

**フレーベル館**

フレーベル館の

# 月刊7誌 (価格据え置きです)

## 大きくのびゆく お子さまのための 月刊保育絵本



ワイド画面

情操をゆたかにし創造力をのばす  
キンダーブック①-情操  
4月号「おはなが いっぱい」  
●付録・こいのぼりの工作  
団体購読価 月 200円



豪華な上製本

幼児の美しい心を育てる  
キンダーおはなしえほん  
4月号「マリーさんのき」  
●付録・こいのぼりの工作  
団体購読価 月 300円



豪華な上製本

科学する心を育て自然に親ませる  
しぜん-キンダーブック③  
4月号「はるのむし」  
●付録・こいのぼりの工作  
団体購読価 月 300円



ワイド画面

観察の眼をそだて心情をゆたかにする  
キンダーブック②-観察  
4月号「みんなともだち」  
●付録・こいのぼりの工作  
団体購読価 月 200円



子どもの自主性をのばし  
ゆとりある保育を考える  
保育専科-今月のカリキュラム-  
●特集・これからの障害児保育  
定価 350円



子どもたちの知的欲求にこたえるために  
だのしい ガクしゅつ  
おおぞら  
●別冊・おかあさんの本  
特別 あいうえおひょうかずのひょう  
付録 こいのぼりの工作  
団体購読価 月 300円



特製厚紙製本

幼児らしい夢をそだてる絵本  
キンダーメルヘン  
4月号「ピンちゃんの あかいくつ」  
●付録・こいのぼりの工作  
団体購読価 月 200円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

### フレーベル館